宮崎県文化財調査報告書

第　24　集

昭和５６年１２月

宮崎県教育委員会

宮崎県文化財調査報告書

第　24　集

昭和５６年１２月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会におきましては，文化財指定のための調査，また，開発工事等によって発見された遺跡についての緊急発掘調査の結果をまとめて，毎年報告書を刊行しております。

今回は，綾町，田野町，小林市，高原町の各地下式古墳，野尻町の梯遺跡および須木村上ノ原地下式古墳群の人骨について報告するものであります。

本書は，本県の歴史解明のための学術資料として研究に活用していただくとともに，社会教育・学校教育の資料として役立てていただきたいと存じます。

なお，調査にあたり御協力いただいた地元の方々，種々御配慮いただいた地元教育委員会の方々に深甚の謝意を表します。

昭和５６年１２月１０日

宮崎県教育委員会

教育長　後藤賢三郎

例　　言

1．この報告書は，宮崎県教育委員会が実施した文化財調査，埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書であるが，綾町，田野町，小林市の各地下式古墳については地元教育委員会において調査されたもので，依頼により掲載するものである。

2．掲載しているのは，地下式古墳関係5，縄文時代遺跡1の合計6件についてである。

3．執筆者名，調査期日等は下記のとおりで，本書の編集は宮崎県教育庁文化課が担当した。

4．地下式古墳，地下式横穴，地下式墳は同一遺構に対しての呼称であるが，使用は各執筆者に従った。

記

番号	遺　跡　名	所在地	調査期日	執　筆　者
1	内屋敷地下式横穴	綾　町	56. 7. 17～20	面　高　哲　郎
2	高野原地下式1号墳	田野町	54. 9.　4	日　高　正　晴
3	下の平地下式横穴	小林市	56. 1. 29	北　郷　泰　道
4	日守地下式古墳群	高原町	56. 3.　9～18	岩　永　哲　夫
5	梯　遺　跡	野尻町	54. 2. 13～17	面　高　哲　郎
6	上ノ原地下式古墳群 人　骨　篇	須木村	55. 5. 20～6. 25	長　崎　大　学

総　目　次

埋蔵文化財

Ⅰ．内屋敷地下式横穴発掘調査 …… 1
（東諸県郡綾町大字南俣字内屋敷２６１０番地）

Ⅱ．高野原地下式１号墳発掘調査 …… 17
（宮崎郡田野町高野原甲１３１２４－１番地）

Ⅲ．下の平地下式横穴発掘調査 …… 31
（小林市大字水流迫字下の平１７９－３番地）

Ⅳ．日守地下式古墳群確認調査 …… 47
（西諸県郡高原町大字後川内１－１１８番地）

Ⅴ．梯遺跡発掘調査 …… 89
（西諸県郡野尻町大字東麓４４０－３６番地）

Ⅵ．上ノ原地下式古墳群発掘調査－人骨篇－ …… 111
（西諸県郡須木村大字中原字上ノ原１７５４番地１）

内屋敷地下式横穴第５６－１号発掘調査

東諸県郡綾町大字南俣字内屋敷２６１０番地

例　　言

1．本報告は，昭和５６年７月１７日から２０日まで綾町教育委員会が実施した内屋敷地下式横穴第５６－１号の発掘調査報告である。

2．発掘調査は，県文化課主事面高哲郎，県総合博物館学芸課主事長津宗重が担当した。

3．本報告の実測，トレースは，面高，長津で行い執筆，編集は面高があたった。

本　文　目　次

Ⅰ　所在地 …… 5
Ⅱ　調査に至る経過 …… 6
Ⅲ　調査の結果
　1．遺構 …… 6
　2．出土遺物 …… 8
Ⅳ　結語 …… 10

挿　図　目　次

第1図　遺跡所在地 …… 5
第2図　第56－1号実測図 …… 7
第3図　第56－1号出土遺物 …… 9

図　版　目　次

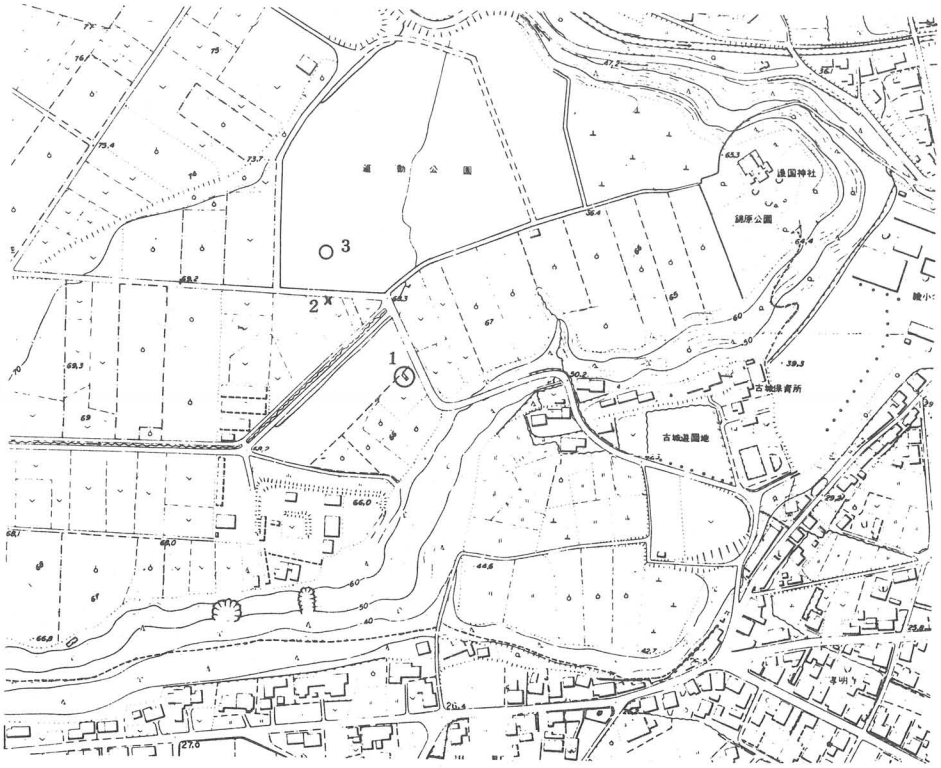
図版1　(1)閉塞状況 …… 13
　　(2)玄室より見た閉塞状況 …… 13
図版2　(1)玄室内人骨出土状況 …… 14
　　(2)櫛，刀子出土状況 …… 14
図版3　出土遺物 …… 15

Ⅰ　所在地（第１図）

綾町は，三角形を呈する宮崎平野の西の頂点に位置する。当町の中央部には，本庄川と綾北川にはさまれ，標高９０ｍから６０ｍへと緩やかに南東へ傾斜する洪積世の台地があり，台地からは，本庄川流域に開ける沖積世が一望に見渡せ，当地は綾町でも眺望のよい地の１つである。台地の東端付近は，現在，運動公園となっており，同公園のフィルド南端には県指定古墳１基が現存している。

綾町は，山１つをへだてて野尻町と接する。平安時代に編纂された「延喜式」には，国府を中心として１６駅が記載されているが，国府より南下する２官道の１つは，国府→亜椰（綾）→野後（野尻）→夷守→真斫（真幸）のルートが想定されており[註1]，綾町は，えびの方面への古代交通の要衝の地であったと思われる。

地下式横穴は，県指定古墳南東約１００ｍの地点で発見された。標高は６７ｍである。この地区での地下式横穴の調査は，今回が初めてであるが，戦前に１基，昭和４３～４４年の土地改良工事中，指定古墳南２０ｍで羨道を東にする長方形妻入りの地下式横穴が発見されている[註2]。この他，工事中において数回陥没しているが，これらは地下式横穴であった可能性が高く，内屋敷一帯は数多くの地下式横穴が存在すると思われる。



第１図　遺跡所在地

1.　内屋敷地下式第５６－１号　2.　昭和４２～４３年発見地下式横穴　3.　県指定古墳

Ⅱ　調査に至る経過

昭和５５年の秋，高橋善文氏所有のミカン園北西辺の防風林の杉が強風により倒伏し，その後の降雨により陥没部が拡大し，昭和５６年７月，綾町教育委員会の現地調査で地下式横穴であることが確認された。陥没部は，地下式横穴玄室の天井で，今後，更に崩壊することが予想されたので発掘調査を行うことになった。調査は，綾町教育委員会が主体者となり，文化課主事面高哲郎，県総合博物館主事長津宗重の２名の担当で昭和５６年７月１７日から２０日までの３日間実施された。

内屋敷一帯には，地下式横穴が群集し，今後，その発見例も増加すると予想されるので，今回調査した地下式横穴を「内屋敷地下式横穴群第５６－１号」として記述する。第５６－１号からは，人骨１体分が出土したが，考証は長崎大学医学部第２解剖学教室講師松下孝幸氏に依頼した。[註3]

調査期間中，高橋氏には，作業を中止してもらうなど多大な協力をいただき感謝いたします。

Ⅲ　調査の結果

１．遺構（第２

内屋敷地下式横穴第　南南
東にし，主軸方位は，　関係
であり，また，台地か
第５６－１号の構造　等に
ついて記述する。

竪穴は，幅1.１５m　mで
側辺が弧状をなす梯形　形部
分より７～８cm深くな　であ
るが，本来逆Ｌ字状を　され
たものかについては確　ホヤ
）の上層である黒色土

第２図　　第５６－１号実測図

閉塞は，羨門閉塞で人頭大から全長４０cm，幅３０cmの河原石を使用している。羨道の位置する梯形部は，長方形部より深いが，閉塞石は，梯形部底面がつき固められ，長方形部のレベルにほぼ等しくされた後，積まれている。

羨道は，やや東へ偏る両袖式妻入りである。幅は，羨門部で７０cm，玄門部で７６cmとわずかに逆「ハ」の字様にひらいている。高さは中央部で約７６cm，天井はほぼ水平となっている。床面は，玄室に向うに従い高くなっている。

玄室は，幅1.６５m，主軸長2.９５m，奥壁隅丸の長方形プランで天井は切妻造りである。西壁長3.０５m，東壁長2.９m，玄室天井の高さは約1.３３mを計測できる。両壁はわずかに外開きに立ち上がり，壁高６５cmから７５cmである。

玄室の西壁に沿って，深さ７～８cmの屍床があり，全長約2.５m，幅４５cm，両端は弧をなしている。屍床内には，頭位を南々東にして男性熟年１体[註5]が埋葬され，副葬品は屍床内で検出された。頭蓋骨は，前頭部から顔面にかけて朱が付着しており，これは，埋葬時に朱玉様のものがおかれていた[註6]ものと思われる。また，左前頭部には，幅1.８cmの竪櫛が着装された状態でみられた。

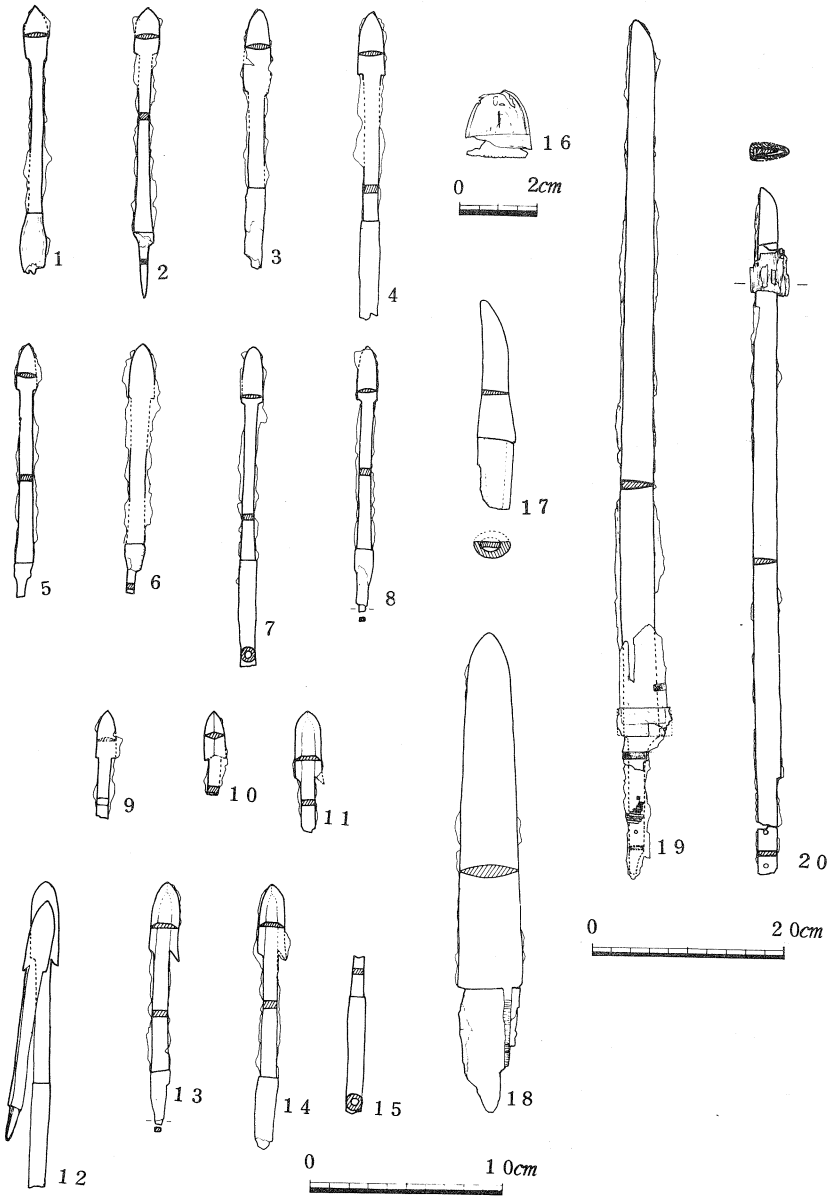
２．出土遺物

出土遺物は，屍床内から直刀，短剣，鉄鏃，刀子が，頭蓋骨左前頭部からは櫛が出土している。直刀は，腰部両側に鋒を頭位方向にして，鉄鏃，短剣は，屍床北端に鋒を反頭位方向にして副葬されていた。鉄鏃は２束あり，１束８～１０本であった。刀子は胸部で出土し，把は胸椎上にあった。

直刀（第３図の１９）

屍床西辺で出土した現長９1.７cmの直刀である。造込，平造。刀長７6.２cm，茎長１4.４cm，元幅4.９cm，先幅3.９cm，元重ね0.８cm，先重ね0.６cm，茎幅は中央部で1.７cmが計測される。刀身に若干内反りとなっているが，直刀と見なしてよいと思われる。目釘穴は１ヶ所が確認される。

把は，木装で把元に幅７mmの平織りの紐が巻かれ，把中央部には糸が繁巻きされている。鞘口には，鹿角製の鉛がある。



第３図　第５６－１号出土遺物

直刀（第３図２０）

屍床東辺で出土した直刀である。造込，平造で全長約７３cm，刀６２.７cm，茎長約１０.３cm，元幅２.３cm，先幅２.１５cm，元重ね０.８cm，先重ね０.８cm，茎幅は中央部で２.２cmを計測される。目釘穴は２ヶ所あり，鞘は合せ木である。

剣（第３図１８）

全長２２.５cm，刃長１８.６cm，茎長３.９cmの短剣である。元幅３.４cm。把は木装で，茎には幅１mmの糸が巻かれている。

刀子（第３図１７）

全長１０.７cm，刃長７.２cm，茎長３.５cmの刀子で身に反りがある。元幅２cm，元重ね２mm，茎先幅７.５mm，茎先重ね２mmを計測できる。把は鹿角製である。

鉄鏃（第３図１～１５）

鉄鏃は，屍床北端で２束発見され，各束の鏃の形式の組合せは異っている。１つは，広鋒両丸造三角形式（１，２），両丸造鑿箭式（３，７，８），狭鋒両丸造三角形式（４～６）の８本組，１つは，鎬造両逆刺三角形式（９），片丸造鑿箭式（１０），断面台形片逆刺箭式（１１～１５）の１０本組である。５は，全長１５.１cm，鏃身長約２.５cm，鏃身最大幅１.３cm，箆被長９.２cm，１３は，現全長１２.７cm，鏃身長約３.６cm，鏃身最大幅１.６cm，箆被長６.１cmが計測される。

櫛（第３図１６）

櫛は，つまみの部分のみ残存している。幅１.８cm，長さ１.８cmで，竹ひごをU字形に折り曲げ緊縛している。緊縛部の幅は０.７cmである。

Ⅳ　結　　語

地下式横穴についての近年の調査，研究は，遺物，編年，群構造，社会などについての研究視点が提示され，深化されつつある。

内屋敷地下式横穴第５６－１号は，立地が極めて緩やかな傾斜の台地上であるが，竪穴を低位に，玄室を高位方向に向って構築されている。岩永は，このような傾斜地における地下式横穴の構築形態は，基本的に高位方向に玄室を構築するが，地下式横穴の群集内においてこの基本形態にそぐわないものも存在することを指摘し，これは，群構成の意識化を読み取ることができるとしている。[註7] 北郷は，地形的に有利な場所を占地する地下式横穴は，編年的に先行するのでないかと考えている。[註8] このことは，旭台地下式横穴群[註9]においては，長方形切妻造平入タイプ[註10]が岩永の言う傾斜地における基本的構築形態をとり，長方形切妻造平入タイプより後出する長方形寄棟造平入タイプは，先の基本的構築形態にそぐわないことから首肯される。地下式横穴が群集過程において，構築形態は時期によりその規制が変化していると考えられるが，今後の課題としておきたい。

長方形切妻造妻入タイプは，屍床をもつ例は多いが，一般に玄室中央部に位置し，単独葬の場合が多く，編年的に古式タイプとされる。内屋敷地下式横穴群第５６－１号のように屍床が一方に偏するのは，飯盛５３－１号[註11]の２例である。飯盛では，北方向に玄室が構築され，屍床は東壁に一ヶ所あり，屍床内に１体，玄室中央部に１体の２体埋葬で副葬品は刀子，管玉のみであった。このタイプの調査例は２例のみであるが，玄室中央に屍床をもつタイプに後出すると考えられる。

内屋敷地下式横穴の遺物については，櫛の出土および出土状態が注目される。櫛が頭部に着装された状態で出土するのは全国でも稀有であるが，県内での出土例は，須木村上ノ原地下式横穴第９号[註12]についで２例めである。上ノ原では，その被葬者を坐者的性格が考えられており，内屋敷地下敷横穴第５６－１号の被葬者を考えるうえで興味深い。

内屋敷地下式横穴第５６－１号は，構造，出土遺物より，５世紀末ないし６世紀初頭の所産と考えられる。

註1.　日高次吉「宮崎県の歴史」山川出版社

註2.　出土遺物は，直刀１，刀子２，鉄鏃５，馬具があり，現在，綾陽校記念館に保管展示されている。

註3.　人骨については，後日報告される予定。

註4.　地下式横穴の構造の表記は，玄室平面形，天井の形態，羨道の位置の順である。

註5.　松下孝幸氏教示による。人骨は，第３頸推まで融合しており，首の運動は不自由であったろうと推定されている。

註 6.　朱玉はベンガラで，小林市尾中原地下式横穴など地下式横穴からの出土例は多く，国富町東ノ原地下式横穴では，須恵器の坏身より朱玉２個が出土している。

註 7.　岩永哲夫，茂山護　「上ノ原地下式古墳群発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第２３集　宮崎県教育委員会　昭和５６年３月

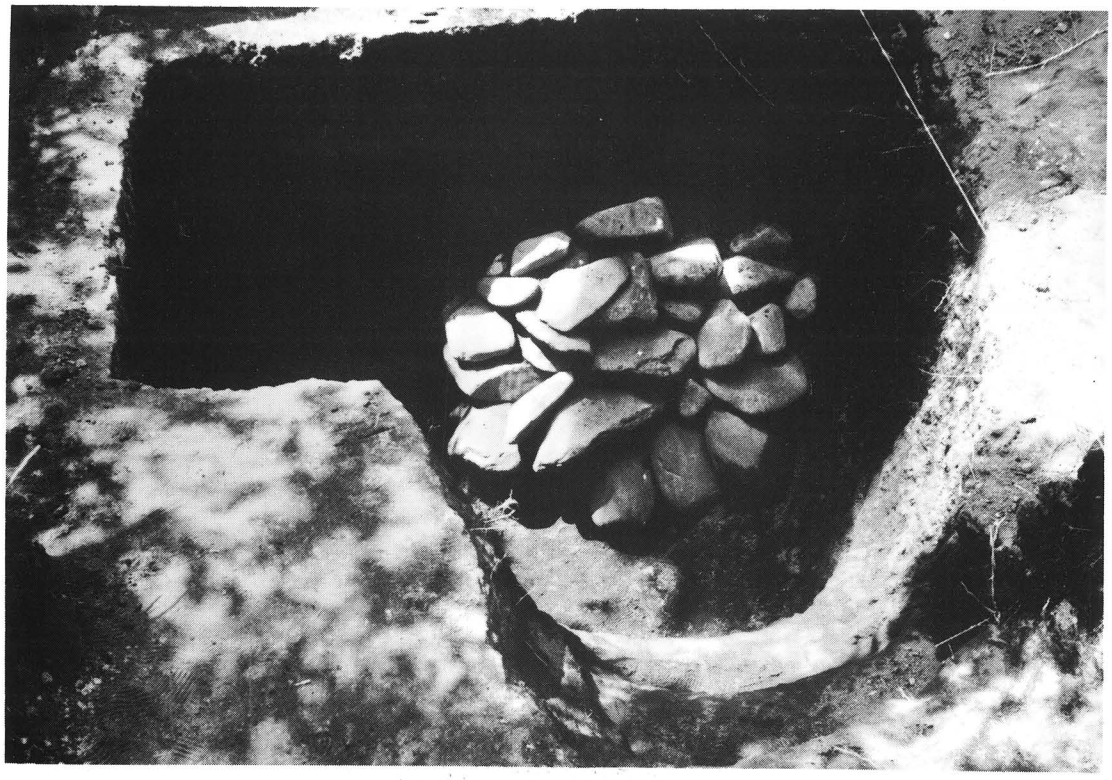
註 8.　岩永哲夫，北郷泰道　「日守地下式古墳群発掘調査（５５－１～４号）」宮崎県文化財調査報告書第２３集　宮崎県教育委員会　昭和５６年３月

註 9.　石川恒太郎他　「旭台地下式古墳群発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第１９集　宮崎県教育委員会　昭和５２年３月

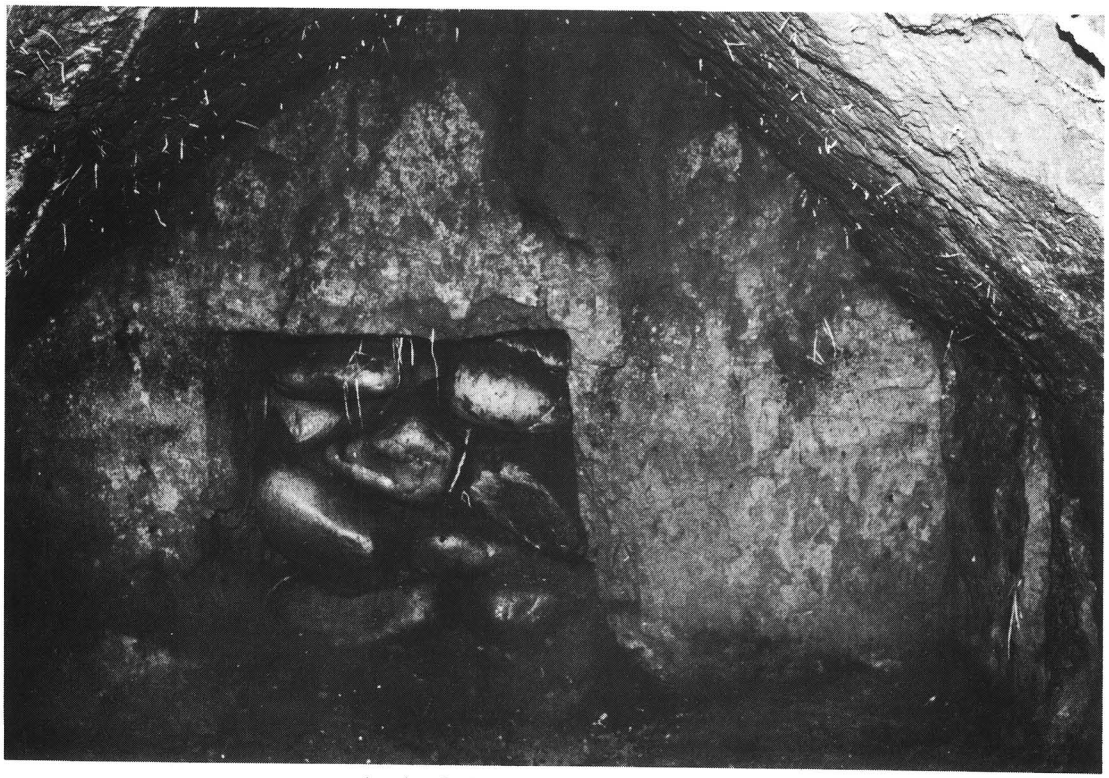
註10.　旭台地下式横穴群の構造は４分類され，長方形切妻造平入のタイプにのみ装飾がみられる。

註11.　面高哲郎，岩永哲夫　「飯盛地下式横穴５３－１号発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第２２集，宮崎県教育委員会　昭和５５年３月

註12.　註 7.に同じ。



（1）閉　塞　状　況



（2）玄室より見た閉塞状況

（１）玄室内人骨出土状況

（２）櫛、刀子出土状況

出　土　遺　物

高野原地下式1号墳発掘調査

宮崎郡田野町高野原甲１３１２４－１

例　　言

1．本報告は昭和５４年９月４日田野町教育委員会が実施した田野町高野原地下式１号墳発掘調査の報告である。

2．本調査は田野町教育委員会の依頼により県文化財保護審議会委員日高正晴が担当した。

3．本報告の執筆は日高があたり，編集は県文化課が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　所在地 …… 21
Ⅱ　はじめに …… 21
Ⅲ　内部構造 …… 23
Ⅳ　出土遺物 …… 24
Ⅴ　まとめ …… 25

挿　図　目　次

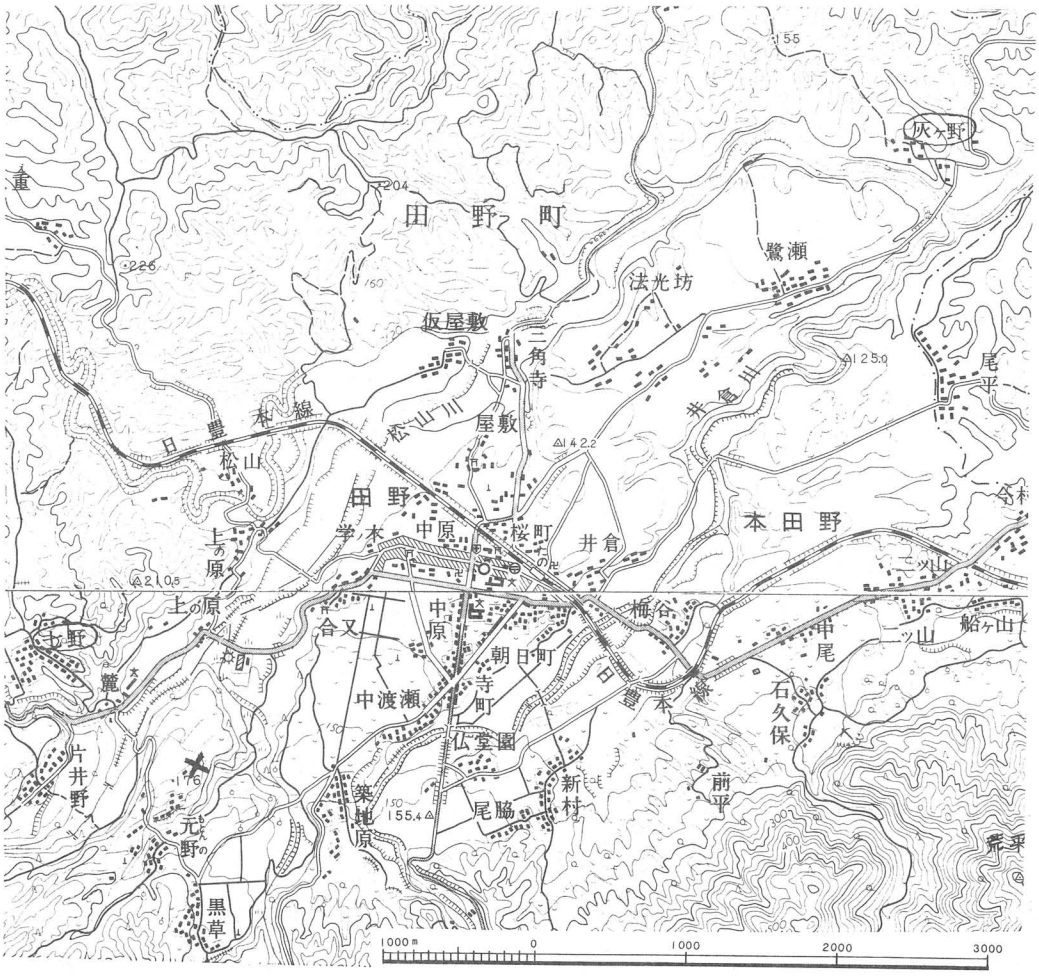
第1図　遺跡所在地 …… 21
第2図　高野原地下式墳実測図 …… 23
第3図　副葬品実測図 …… 24

図　版　目　次

図版1　(1)　発掘現場の近景 …… 27
　　(2)　羨道から玄室を見る …… 27
図版2　(1)　玄室と閉塞石 …… 28
　　(2)　竪穴と玄室 …… 28
図版3　副葬品 …… 29

Ⅰ　所在地（第１図）

田野町高野原甲１３１２４－１



遺跡所在地（×印は地下式墳発見地）

Ⅱ　はじめに　（第１図）

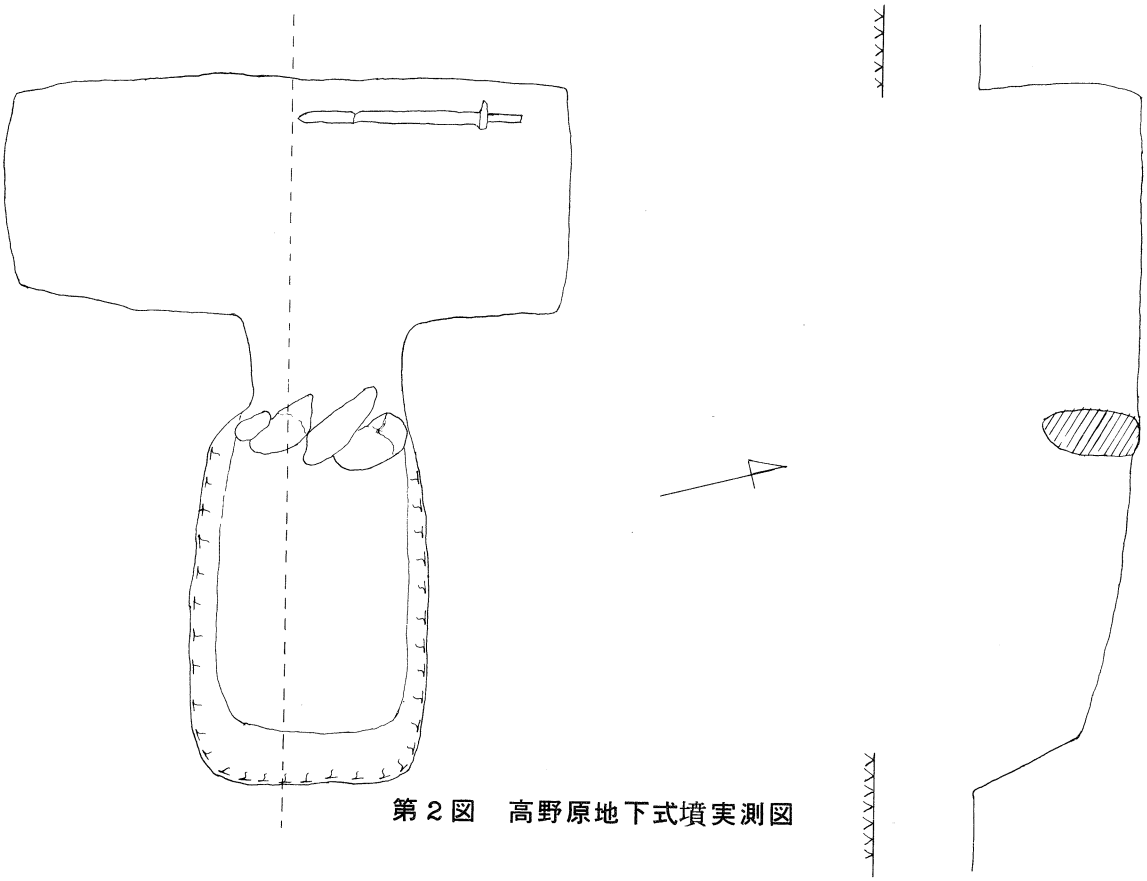
田野町高野原の畑地を，地主の日高義正氏がトラクターにて耕作中，突然，地面が陥没したので，現地調査に赴くようにとの，県教委文化課からの依頼で，昭和５４年９月４日，田野町教育委員会の田原信幸主事らと発掘調査を行った。

ところで，田野町を流れている清武川の上流は，松山川と変り，さらに上の原付近で分流し，別府田野川と片井野川に分れるが，この二支流に挟まれた三角形状の広い平担な台地が，標高約１７０ｍの高野原である。この台地上から東北の方を望むと，低い台地が清武方面に開けているが，一方，南から西の方へかけては鰐塚山山系の高い山々がそびえている。この地下式墳発見地点の台地のすぐ東の方には，別府田野川の小支流が流れており，その地域に元野の集落がある。ところで，宮崎県内の地下式墳の分布状態からみると，清武・田野方面は，ほとんど発見例がなく，わずかに，昭和４７年８月と同年９月の２回にわたり，清武川左岸台地上の田野町灰ヶ野において地下式墳が２基発見され，発掘調査が行われただけである。それで，今日まで古墳時代の遺跡としては高塚墳も確認されていないので，このたびの高野原での地下式墳の発見は，田野町の古代史を探究する上からも注目しなければならない。また，この広い台地上には，ほかにも地下式墳が存在するはずであると考えていたが，その後，町教委の方の談話によると，以前，この高野原台地から地下式墳らしき遺構が発見されたとのことであった。

では，どうして田野町でも辺地にある高野原台地に地下式墳が群集しているのであろうか，そのことについて，歴史地理的見地から考えてみたいと思う。大和国家における中央集権的な律令体制下においては，京から地方の国衛に至る官道が設けられたが，日向においても，奈良，平安時代を通じて，西都市に所在した日向国府を中心に官道に沿って駅が設置された。延喜式によると，日向には１６駅あったと記されている。この官道は国府の存在した西都市三宅付近において二つに分かれ，一方は亜椰（あや）駅，野尻（のじり）駅，夷守（ひなもり）駅，真斫（まさき）駅を経て肥後の球磨郡に通じる駅路と西都から南に下り，宮崎郡の各駅を通り都城地区と推測される島津駅に到る駅路である。この途中に救磨（くま）郡と救弐（くに）駅がある。喜田真吉著『日向国史』上巻によると，救磨駅は宮崎市熊野に比定されているが，救弐駅については，その所在は明らかではないとされながらも，田野町七野付近に想定されている。この七野の直ぐ東の方の広い台地が，このたび地下式墳の発見された高野原台地であることから考えると，田野地方における古代の中心地に救弐駅が設置され，さらにその駅路時代をさかのぼる古墳時代に七野一帯から高野原にかけて古代集落が存在したのではなかろうか，そして，灰ヶ野からも地下式墳が発見されたことから推測されることは，清武を通過した古代交通路は田野では清武川の北岸を通り，七野地区から青井岳山系を越え諸県の水俣（みまた）（三股）駅を経て島津駅に通じていたと思われる。

また，平安時代末期，「鹿谷（ししがだに）の変」により鬼界ヶ島に流された俊寛僧都らが通った道筋として，『源平盛衰記』に記されているように，宮崎市の赤江港に上陸した一行は清武の船引

を経て，おそらく灰ヶ野付近から七野地区を通過，島津の庄へと足どり重く，歩を進めたものと思う。



第２図　高野原地下式墳実測図

Ⅲ　内部構造　（第２図．図版１，２）

現地調査によって，陥没穴は地下式墳であることが判明したが，トラクターによる耕作のため，玄室，羨道部ともに天井部は破壊されていた。

それから，この地域の地層は黒色の腐蝕土層が約３０*cm*，その下は灰褐色粘土質層になっている。地下式墳はこの層を掘削して営造されていた。なかに落ち込んだ崩土を掲げると，第２図のような玄室の一方の長軸に羨道が開口している平入型の地下式墳が現出した。本墳の主軸の方向はＮ７４°Ｗとなっており，羨道は東東南の方向に向いている。玄室は奥行（中央部）７５*cm*，幅１７４*cm*で横の方へ細長い形式である。また，玄室の四隅はすべて角張っているが，天井部の形式は崩壊がはげしいため不明である。しかし，内部遺構から推測す

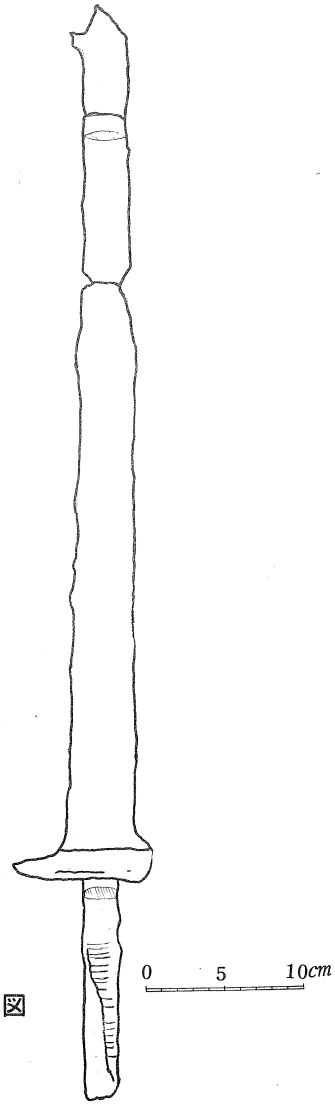
ると，切妻様式からドーム型の様式に移行する過渡期の形式のようである。なお，床面には何らの遺構も認められず，敷石なども全く施されていない。羨道は玄室の床面と同一レベルで，奥行３１cm，幅４５cmとなっているが，高さは天井部が崩壊しているため不明である。また，羨門の所に閉塞石として，約２５cm～４０cmの自然石４ケが立石の状態にて並べられていた。竪穴は楕円形状を呈しているが，その東側は，当時の地表面から一旦，急傾斜で下がり，その後は緩やかな勾配をもって羨道に連なっている。竪穴は長さ１１５cm，幅７４cmある。

Ⅳ　出土遺物

本墳の副葬品としては，玄室内の西北部壁面寄りに剣が一振，発見されただけで，ほかには何らの遺物も検出できなかった。

剣（第３図，図版３）

出土の剣は全体に銹化が進んでいるが，鞘の中ほどには，木質部が，わずかではあるが遺存している。また，剣身は中央部から鋒の間で２ケ所折れていた。さらに柄元の部分には鹿角製装具が着装されているが，また，柄頭に寄った部分には，細い繊維質の物で柄を巻き締めてあるのが確認できる。柄の部分は，ちょうど，柄元で折れているが，剣全体としては完全に接合できる。剣の全長は６９.２cm，剣身５５.２cm，剣身の中程から少し鋒寄りで，身の幅３.３cm，同じく厚さ０.７cmとなっている。また，柄の部分は長さ１４cm，幅２.２cm，それに厚さ０.８cmである。



第３図　副葬品実測図

Ⅴ　まとめ

以上，高野原発見の地下式墳について考察してきたが，既述したように，田野町においては古墳時代の遺跡，特に，墳墓に関して，極めて発見例が稀であり，灰ヶ野の地下式墳以外は，全く認知されていない。また，このたびの地下式墳発見によって，もたらされる歴史的見解としては，七野を中心とした高野原一帯が，田野地域における古代交通路の要衝にあたっていたのではないかということである。

さて，この地下式墳における玄室の内部構造は長軸に羨道を有する平入り式の形式になっているが，昭和４７年８月，田中茂氏によって発掘調査された田野町灰ヶ野の地下式墳[(1)]，さらに同年９月，石川恒太郎氏により調査された地下式墳[(2)]の，それぞれの玄室内部も，ともに，この高野原の場合と同様，玄室に対し羨道が直交する平入り式の形式になっている。また，田中氏調査の地下式墳の副葬品としては，本県では珍しい蛇行状剣身も発見されており，編年的にも同一年代に比定されそうである。また，この高野原の地下式墳のプランに極めて類似しているものとして，六野原の桃木畑地下式Ａ号墳[(3)]をあげることができる。この場合も鹿角装の刀子が１本発見されているが，両方の地下式墳ともに，玄室の構造が，ほぼ同一形式を呈している。それで，筆者は大型で玄室の短軸の方に羨道を有する妻入り型の地下式墳を第一様式[(4)]とし，このように玄室の長軸に羨道を有する平入りの形式を第２様式とした。そして，第２様式の中でも第１様式的遺構の遺存しているものを第２様式Ａ類[(5)]に類別した。このように分類すると，本墳の編年も桃木畑と同様，第２様式Ａ類とするのが妥当と思われる。それで，年代的には，６世紀初頭頃と推定したい。

ところで，現在まで，宮崎市の下北方の地下式墳から以南，清武町にかけて確認されたことのない地下式墳が飛び離れて，田野町だけに発見されていることを，どのように考察したらよいか。そこで考えられることは，前述したように，古代官道に沿って，西の方，青井岳の山地を越えると，すぐ山之口，高城方面の地下式墳分布地に連なる。それで，古代において諸県地方との交流により，地下式古墳文化の流入があったのではないかと考えられるが，一方，国富町六野原で，類似した地下式墳が発見されていることも考慮に入れると，今後，田野地方の文化交流について，さらに究明を重ねなければならないと思う。なお，この高野原台地から，今後，地下式墳が発見されることを想定して，本墳を１号と名称づけておく。

註　(1)　田中茂「灰ヶ野地下式横穴」宮崎県立総合博物館　『研究紀要』昭和４７年度

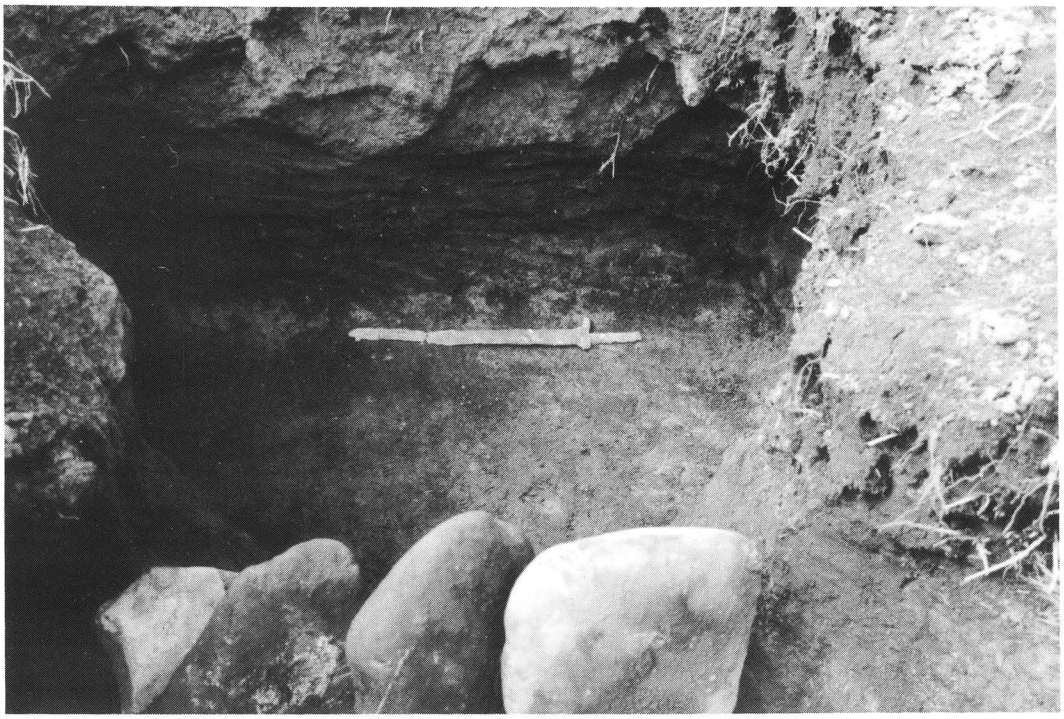
(2)　石川恒太郎「田野町灰ヶ野地下式古墳調査報告」　『宮崎県文化財調査報告書』第１７集　県教育委員会　昭和４８年３月

註 (3) 日高正晴「宮崎県桃木畑地下式A号墳」『古代学研究』第64号

(4) 日高正晴「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』第43巻4号

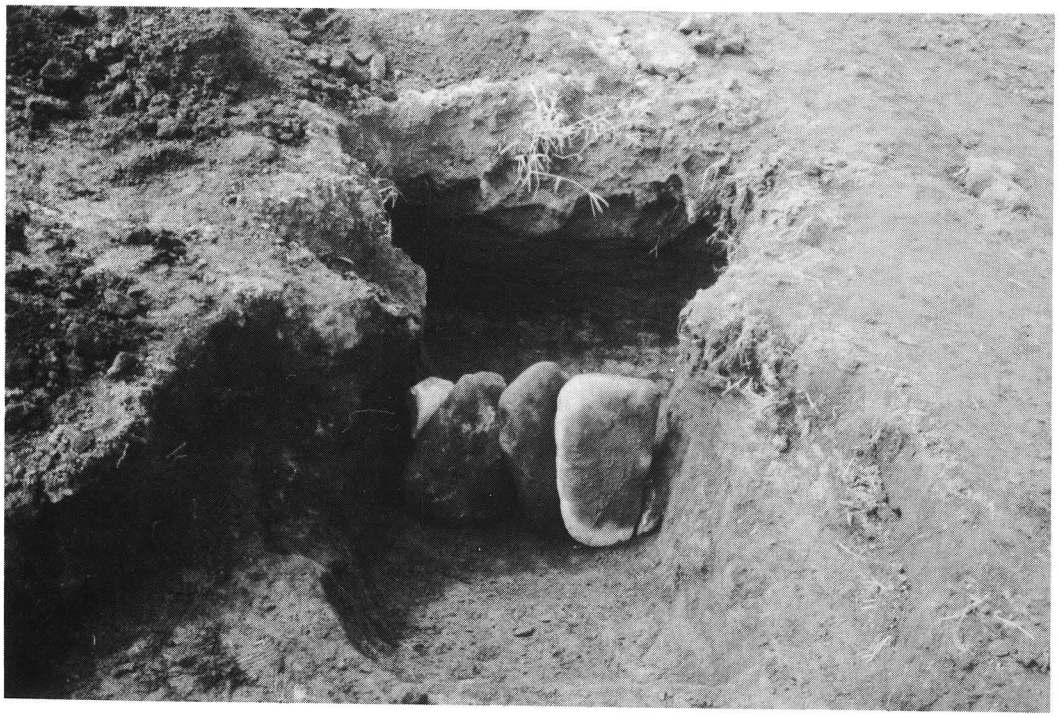
(5) 註(3)と同じ。

(1) 発掘現場の近景



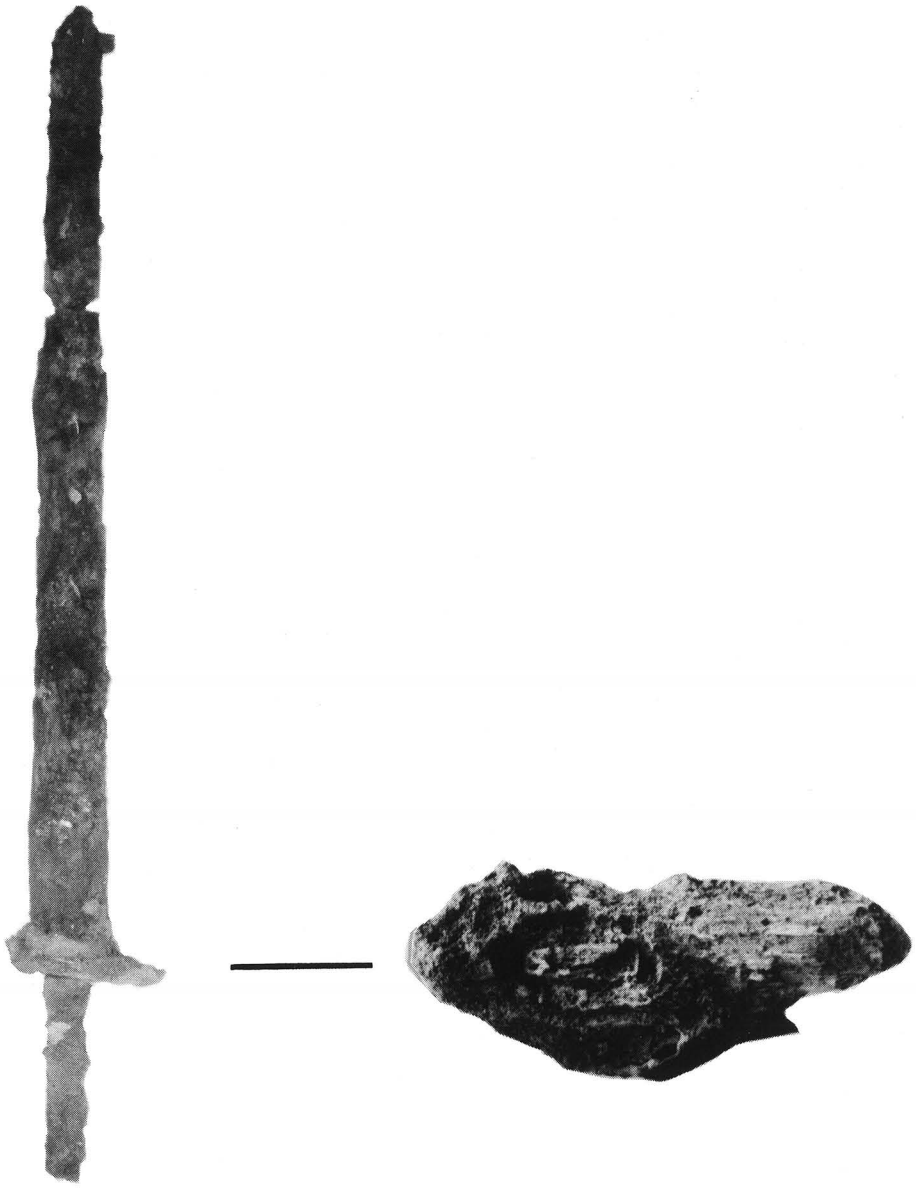
(2) 羨道から玄室を見る

（1）玄　室　と　閉　塞　石



（2）竪　穴　と　玄　室

図版 3



副　葬　品

下の平地下式横穴発掘調査

小林市大字水流迫字下の平１７９～３番地

右壁線刻文

例　　言

1．本報告は昭和５６年１月２９日に小林市教育委員会が実施した下の平地下式横穴の発掘調査報告である。

2．発掘調査は，県文化課主任主事岩永哲夫，主事北郷泰道が担当した。

3．本報告の執筆・編集には北郷があたった。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 37
Ⅱ　調査に至る経緯 …… 37
Ⅲ　調査の結果 …… 38
Ⅳ　まとめ …… 42

挿　図　目　次

第1図　遺跡所在地 …… 37
第2図　下の平地下式横穴実測図 …… 39
第3図　副葬品実測図 …… 41

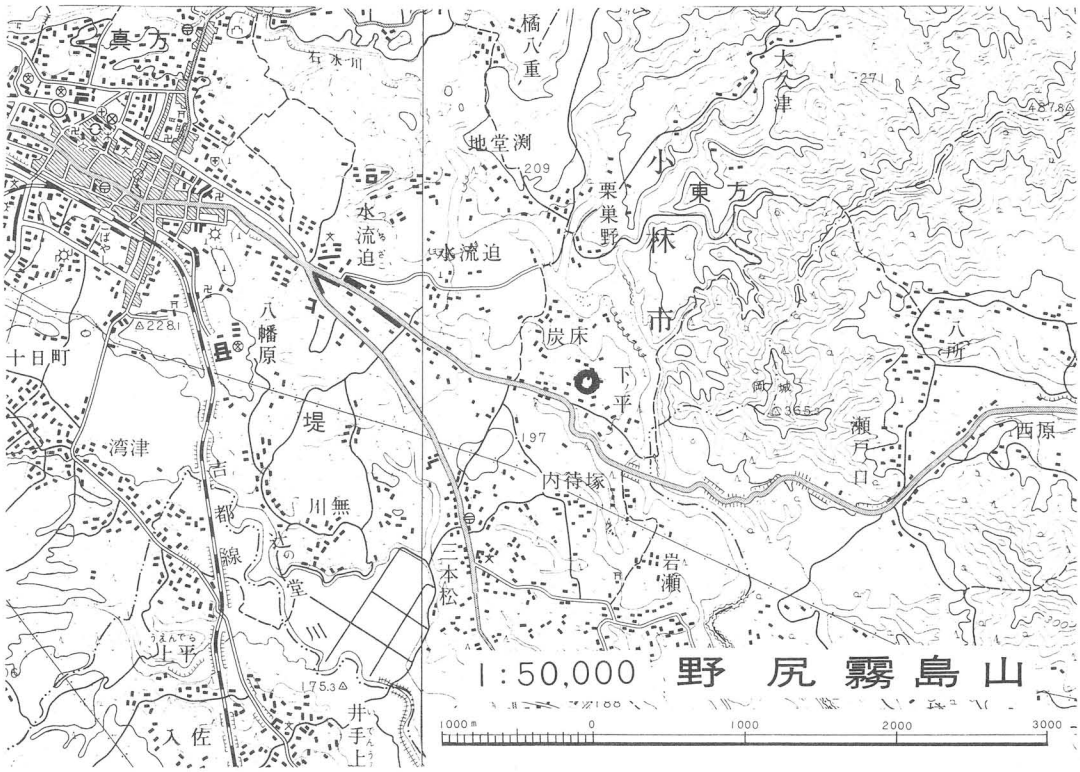
図　版　目　次

カラー口絵　右壁線刻文 …… 33
図版1　(1)　発掘前の状態 …… 43
　　(2)　竪壙部閉塞石の状態（北から） …… 43
図版2　(1)　竪壙部閉塞石の状態（南から） …… 44
　　(2)　奥壁副葬品の状態 …… 44
図版3　(1)　右壁線刻文と副葬品の状態 …… 45
　　(2)　頭蓋骨の状態 …… 45
図版4　出土副葬品 …… 46

Ⅰ　所在地（第１図）

下の平地下式横穴は，大淀川の支流岩瀬川の右岸，国道２６８号線添いの台地上に位置し，小林市大字水流迫字下の平１７９～３番地に所在する。

小林市においてこれまで発掘調査された地下式横穴は，尾中原地下式横穴[1]，新田場地下式横穴[2]等であるが，下の平周辺地においても過去発掘調査はなされていないが地下式横穴の存在は幾つか知られており，やはり一つの群集地と考えられる。



第１図　遺跡所在地（○印）

Ⅱ　調査に至る経緯

土地所有者である伊木操氏（小林市大字水流迫下の平２０４の２）が，ゴボウの播種を行おうとトレンチャーによる耕作を実施したところ，地表に陥没が生じ今回の発見となった。小林市教育委員会では，早速県文化課と連絡をとり昭和５６年１月２９日発掘調査を実施す

ることになった。

発掘調査は小林市教育委員会が調査主体となり，県文化課主任主事岩永哲夫・主事北郷泰道が調査員として発掘調査に当たった。

Ⅲ　調査の結果　（第２図）

トレンチャーの掘削により竪壙部側の天井部半分程は崩壊し，又永年の耕作により竪壙部の本来の掘り込み面は失われていた。

玄室の主軸は竪壙の主軸に対し，東へ約２４°偏していた。玄室の構造は，左片袖とみられるが，右壁も５cm程の袖部の掘り込みが見られた。羨門部は河原石による閉塞で，平入り・天井部は切妻造りの変形と思われる。玄室は，天井部を第１オレンジ（アカホヤ）層とし，以下は黒褐色土層に掘り込んで構築されている。

玄室の規模は，奥壁幅１９２cm，左壁幅２２１cm，右壁幅１９６cm，羨門部側の幅１９８cm，天井の高さ約９０cmを測り，四周には幅１２～３３cmの棚状施設が設けられている。

被葬者は３体で，副葬品はすべて棚状施設上に置かれていた。

また，玄室右壁には格子目状の線刻と束柱を表現したと思われる線刻が彫り込まれていた（図版３－１）。

遺　物　（第３図）

遺物は棚状施設上への副葬の状態から２群に分けられる。１群は，奥壁棚状施設上のもので，２群目は右壁棚状施設上のものである。以下は各群に分け，遺物について記述する。

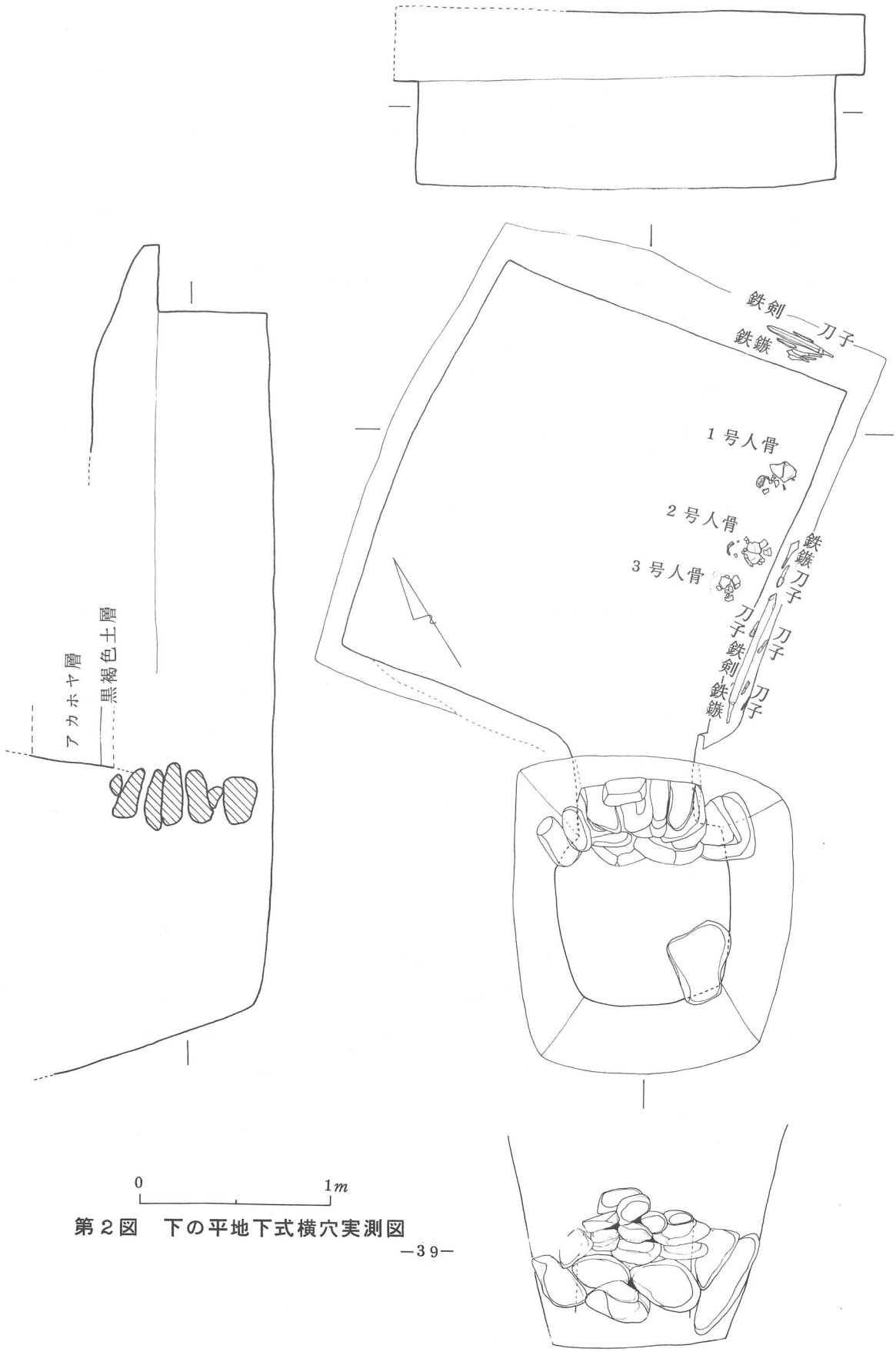
１群の遺物

鉄　剣　（第３図２）

現存長３７.９cmで鋒をわずかに欠損している。現存の身長２７.９cm，関よりでの身幅３.２cm，鋒よりでの身幅２.６cmを測る。身の厚さは中央部で０.４cmである。茎には把の木質がわずかに残存し，目釘穴が１箇所確認出来る。茎幅は関よりで２.４cm，把頭よりで１.５cmを測る。

刀　子　（第３図４）

鋒部を欠損し，現存長９.４cmを測る。関よりでの身幅１.７cm，背幅０.３cmである。



第２図　下の平地下式横穴実測図

鉄　鏃　（第３図９～１２）

鉄鏃は４本で，大略三角形式に属するが，２群の鉄鏃に比し小型のものであることが注目される。９は鋒にかけてやや丸みを帯び，現存長１２.１cm，最大鏃身幅２.９cm，身の厚さ０.２cmを測る。１０•１１は同タイプの鉄鏃で，１０より１１の方がややかえりがきつくなっている。１０は，現存長１３.１cm，最大鏃身幅３.１cm，身の厚さ０.４cmを測る。１１は，現存長１５.１cm，最大鏃身幅３.１cm，身の厚さ０.３cmを測る。１２は鋒部を大きく欠損し，現存長１１.６cmを測る。

２群の遺物

鉄　剣　（第３図１）

現存長７０.２cm，身長５７.３cm，関よりでの身幅３.７cm，鋒よりでの身幅２.８cm，茎の中央部幅１.９cm，身の厚さ０.５cmを各々測る。鞘の木質が片面の関よりに遺存し，目釘穴は１箇認められる。

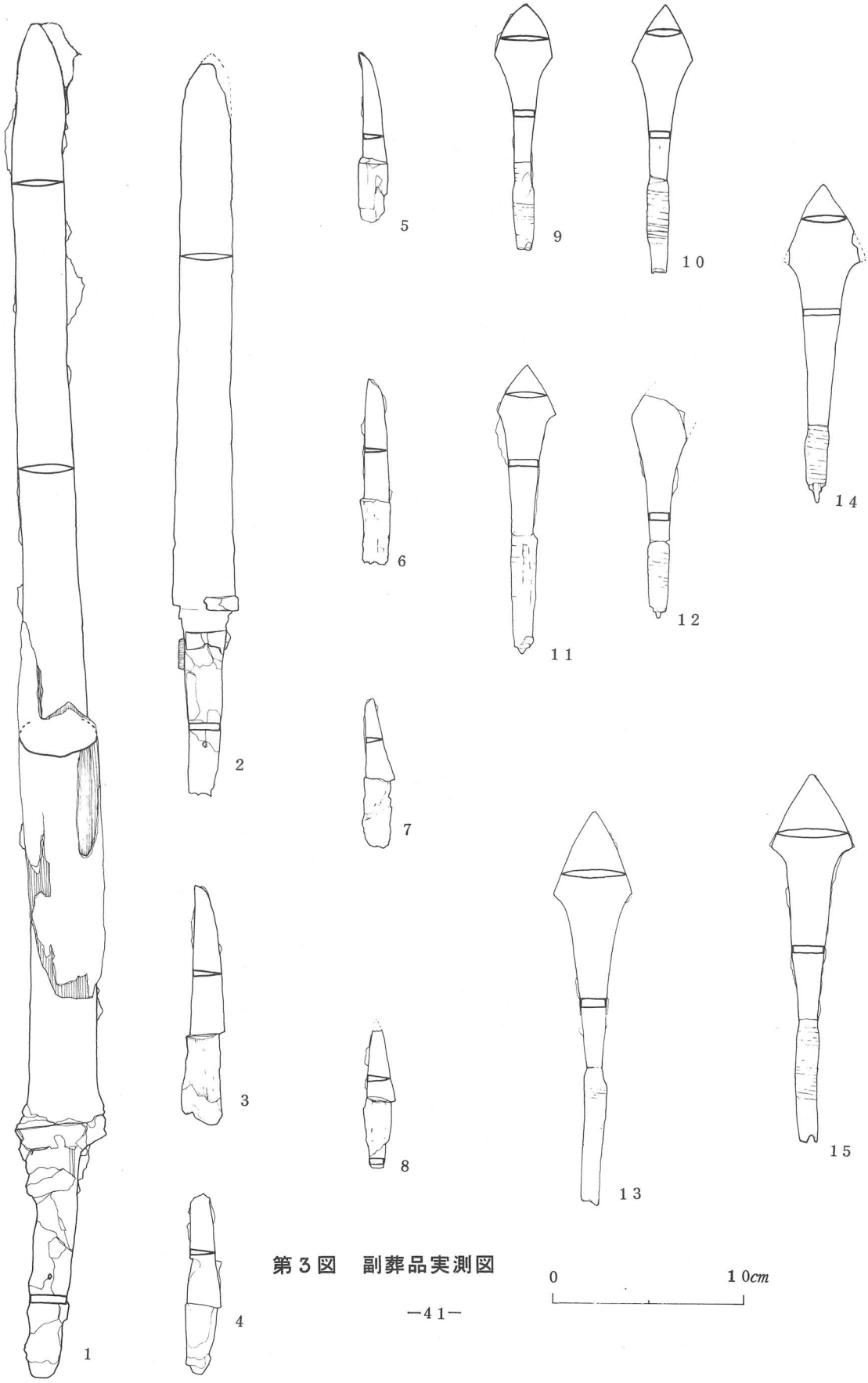
刀　子　（第３図３，５～８）

３は，副葬された刀子中最も大きく現存長１２.５cm，身長７.８cm，身の最大幅１.８cm，背幅０.４cmを測る。

５は，現存長８.４cm，身長５.３cm，身の最大幅１.３cm，背幅０.３cmを測る。６は，現存長９.６cm，身長６.３cm，身の最大幅１.３cm，背幅０.２cmを測る。７は，現存長７.８cmで若干鋒を欠き現存身長４.２cm，身の最大幅１.５cm，背幅０.３cmを測り，鋒から刃区にかけて湾曲した切り出し部をもつ。８も鋒を欠損し現存長７.２cm，現存身長３.６cm，身の最大幅１.５cm，背幅０.３cmを測る。

鉄　鏃　（第３図１３～１５）

１３は，現存長２０.６cm，最大鏃身幅４.１cm，厚さ０.４cm，１４は，現存長１６.４cm，現存鏃身幅３.７cm，厚さ０.３cm，１５は，現存長１９.２cm，最大鏃身幅４.３cm，厚さ０.５cmをそれぞれ測る。いずれも竹の矢柄が遺存し，桜皮も認められる。



第３図　副葬品実測図

Ⅳ　まとめ

下の平地下式横穴の平面プランは特徴的で，竪壙主軸に対し玄室はやや南東に偏するものであった。こうした傾向は，国富町高田原地下式横穴[3]等にも見られる。

玄室右壁に認められた線刻文様は，格子目状と束柱を表現したものと思われ，束柱を浮彫で表現した日守地下式横穴５４－１号[4]，旭台地下式横穴７号・９号・１１号，朱彩で表現した旭台地下式横穴６号[5]があるが，本地下式横穴は単純な線刻のみで表現されている。又，格子目状の文様を線刻した地下式横穴は新発見に属する。

地下式横穴の年代としては，六世紀前半に位置付けられよう。

（註）

(1)　栗原文蔵「小林市尾中原発見の地下式横穴」『宮崎県文化財調査報告書』第９輯（昭和３９年）

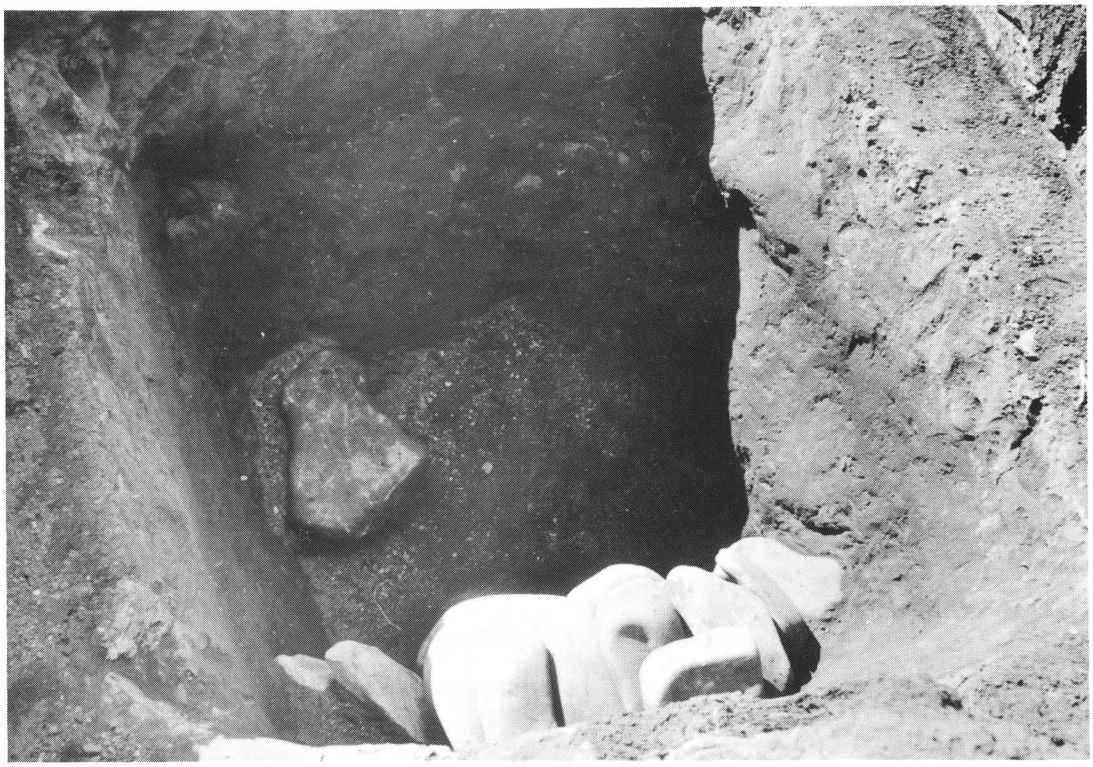
(2)　岩永哲夫「新田場地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第２０集（昭和５３年）

(3)　昭和５６年５月に国富町教育委員会が調査主体となり実施した。報告書未刊。

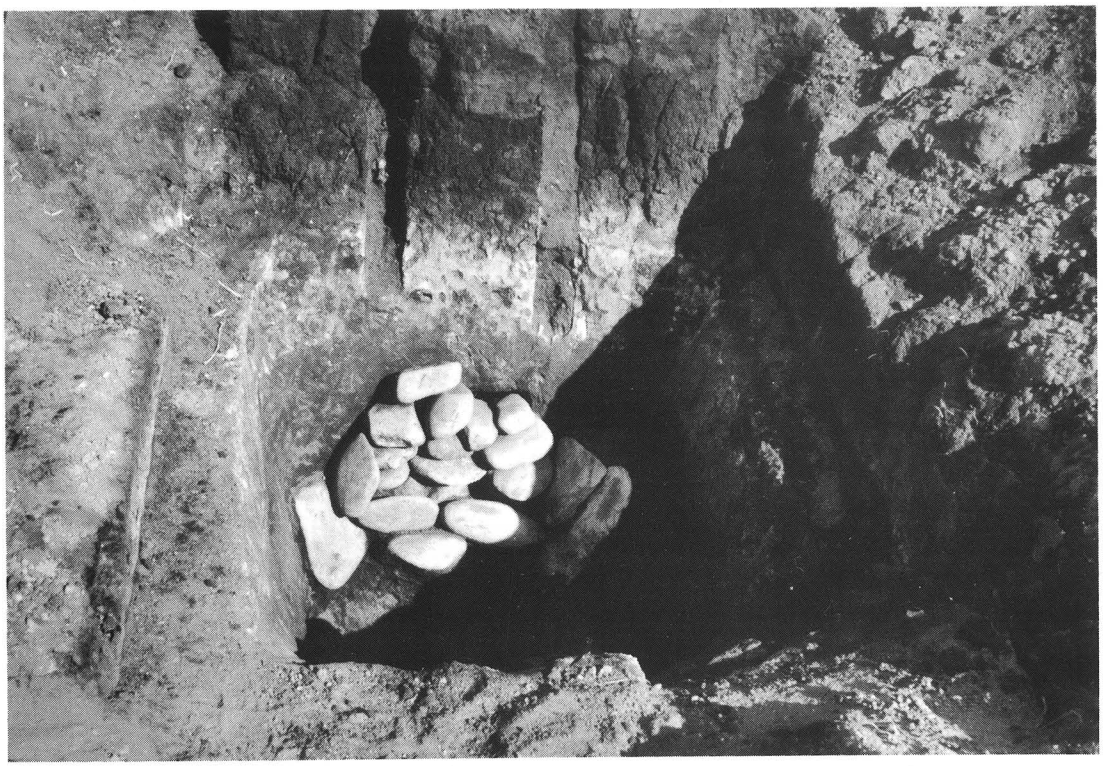
(4)　岩永哲夫ほか「日守地下式横穴５４－１～４号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第２２集（昭和５５年）

(5)　石川恒太郎ほか「旭台地下式古墳群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第１９集（昭和５２年）

（I）発　掘　前　の　状　態

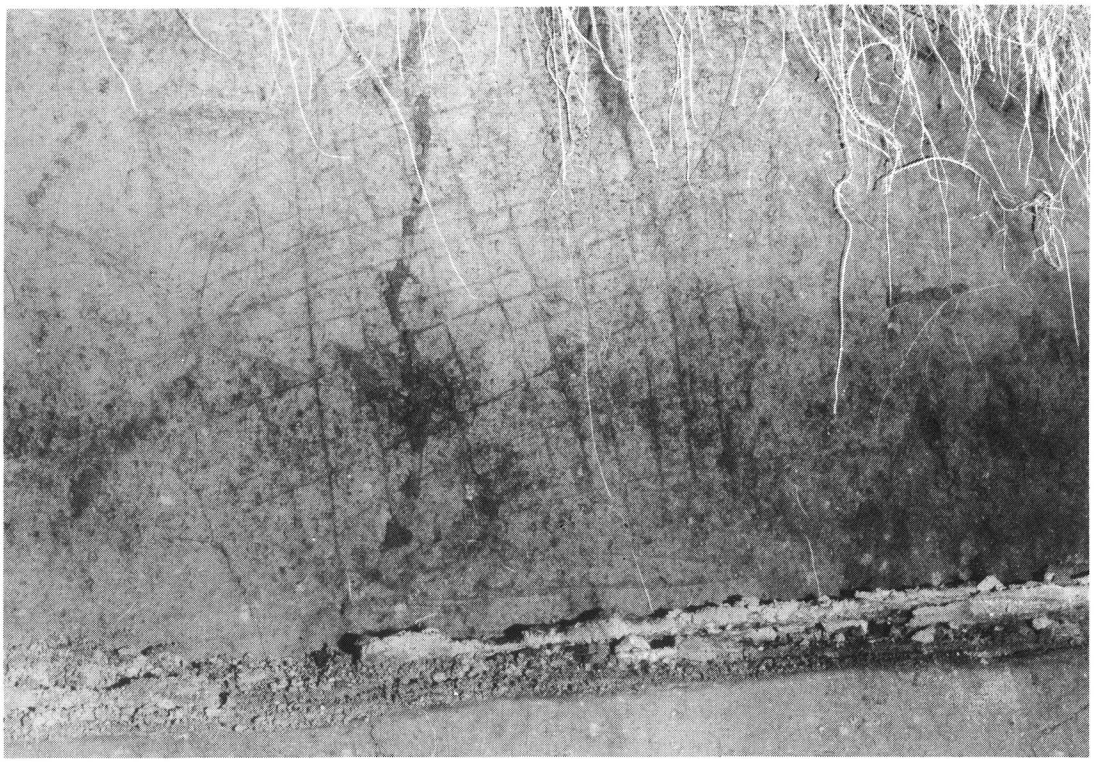


（2）竪壙部閉塞石の状態（北から）



（1）竪壙部閉塞石の状態（南から）

（2）奥壁副葬品の状態



（１）右壁線刻文と副葬品の状態

（２）頭蓋骨の状態（右から１号、２号、３号人骨）

出　土　副　葬　品

日守地下式古墳群確認調査

西諸県郡高原町大字後川内１－１１８番地

例　　言

1．本報告は昭和５６年３月９日から同月１８日まで宮崎県教育委員会が実施した西諸県郡高原町日守地下式古墳群確認調査の報告である。

2．本調査は文化課主任主事岩永哲夫が担当した。

3．本報告の執筆・編集は岩永があたり，宮崎大学教育学部教授遠藤尚氏には玉稿をいただいた。記して感謝申し上げる。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 52
Ⅱ　日守地区における調査小史 …… 53
Ⅲ　調査経過 …… 55
Ⅳ　調査結果 …… 55
　1　遺構 …… 57
　2　遺物 …… 59
Ⅴ　結　語 …… 62
（付論）
宮崎県西諸県郡高原町日守遺跡の地形的・地質的背景
宮崎大学教育学部教授　遠　藤　　尚
1　はじめに …… 77
2　遺跡周辺における山地と凹地の配列 …… 79
3　凹地域の埋積 …… 80
4　凹地底の段丘化 …… 81
5　日守遺跡について …… 83

挿　図　目　次

第1図　遺跡所在地 …… 52
第2図　日守地下式古墳群分布図 …… 56
第3図　1号地下式古墳実測図 …… 57
第4図　4号地下式古墳実測図 …… 58
第5図　7号地下式古墳竪坑部壁面実測図 …… 59
第6図　E－9区土器群実測図 …… 59
第7図　H－10区土器群実測図 …… 60

第８図　出土遺物実測図（１）…… 61
第９図　出土遺物実測図（２）…… 61
第10図　出土遺物実測図（３）…… 62
（付論）
第１図　宮崎県西・北諸県地方の山地と凹地 …… 78
第２図　日守遺跡周辺の地形・地質区分図 …… 80
第３図　日守遺跡における火山灰層 …… 84

図　版　目　次

図版１　(1)　遺跡遠景 …… 65
　　(2)　発掘作業状況 …… 65
図版２　(1)　１号地下式古墳竪坑 …… 66
　　(2)　２号地下式古墳竪坑 …… 66
図版３　(1)　３号地下式古墳竪坑 …… 67
　　(2)　剣出土状況 …… 67
図版４　(1)　４号地下式古墳竪坑 …… 68
　　(2)　４号玄室上部土層状況 …… 68
図版５　(1)　５号地下式古墳竪坑 …… 69
　　(2)　６号地下式古墳竪坑 …… 69
図版６　(1)　７号地下式古墳竪坑 …… 70
　　(2)　高杯出土状況 …… 70
図版７　甕出土状況 …… 71
図版８　出土遺物　(1) …… 72
図版９　　〃　　(2) …… 73
（付論）
図　版　日守遺跡西側土層断面 …… 75

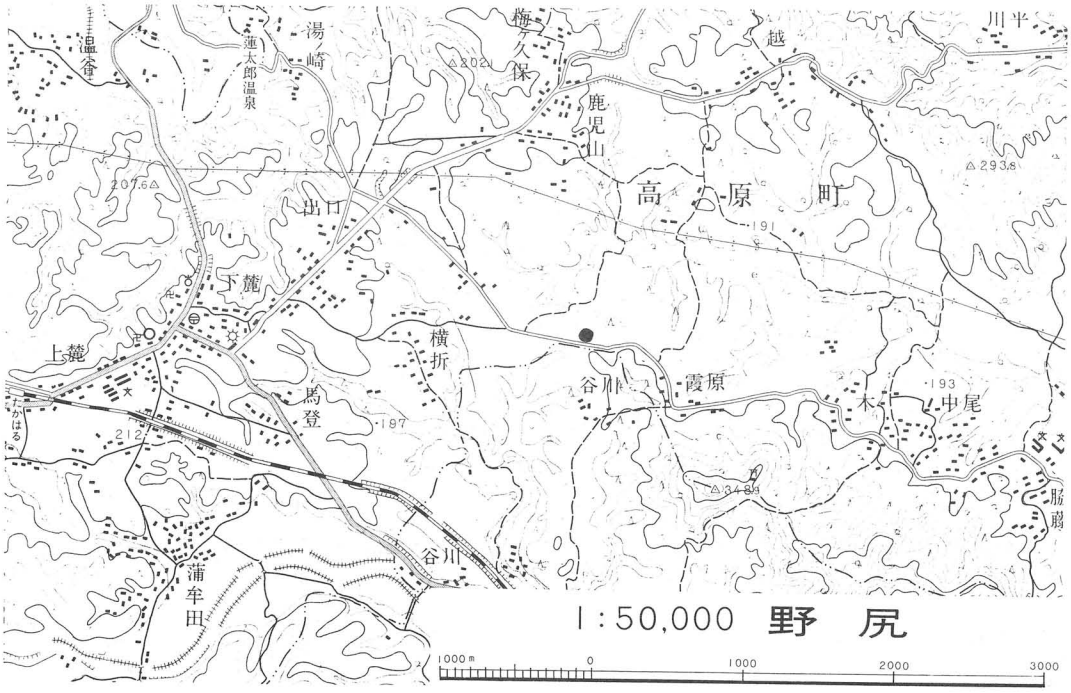
Ⅰ　はじめに

地下式古墳は南九州特有の古墳時代墓制の一つである。宮崎・鹿児島両県にまたがり分布するが，本県の諸県地方から最も多く発見されている。発見の契機は，ほとんどが工事中や畑地耕作中などに玄室天井部が偶然陥没することに因っている。それは，構築の一要素として盛土を行ったかどうかは別の問題として現況では地上標識を有しないものが大半を占めることに起因している。えびの市小木原古墳，久見迫・馬頭・灰塚地下式古墳群は，昭和４７・４８年九州縦貫自動車道建設工事に際し，事前調査として県教委により発掘調査が行われたが，これ等は数少ない事前調査の例である。

石川恒太郎氏の資料[(1)]によると，昭和５４年７月現在県内では約５００基発見されている。

地下式古墳の性格上，一度開口すると，玄室内部の風化侵蝕が進み，保存には非常な困難が伴うことは周知のことであり，現に保存されている例は西都原地下式第４号の一基のみとなっている。また，工事等の結果発見されるため，より一層保存を困難にしている。

今回の日守地下式古墳群における確認調査は，道路建設事業及び採土工事によって発見されたものを手掛りとして，周囲丘陵にも相当数存在するのではないかという予測から，東側



第１図　遺跡所在地　（●印）

丘陵について，地下式古墳群の全容（分布状況）を把握し，遺跡保護の基礎資料を作成することを目的としたものである。

現在までのこの日守地区における発掘調査例は，１１基にのぼるが，道路開削の際確認された６基を合わせると１７基の多くを数える。また現況が保たれている丘陵の法面に２ヶ所地下式古墳の竪坑とみられる痕跡が観察されることや，残っている丘陵の面積の広さを考えるならば，なお相当数の未確認地下式古墳が存在することは容易に予測できることであった。

注1.　石川恒太郎　「増補地下式古墳の研究」昭５４．

Ⅱ　日守地区における調査小史

西諸県郡高原町大字後川内日守地区において，地下式古墳の調査が行われたのは昭和４４年夏の宮崎県教育委員会による九州縦貫自動車道遺跡分布調査が最初である。この頃既に県道有水高原線は開通していたが，道路建設の際の工事によって削取された道路北側法面に開口していた６基の地下式古墳が確認された(1)。地下式古墳の所在している場所は，低い小丘陵を成しており，切土工法による道路で二分されている状況である。

その後，同年１２月道路南側の北諸県郡高崎町大字前田仮屋尾において，ブルドーザーにより傾斜のある畑地を削平工事中，地下式古墳が２基発見され，発掘調査が行われている。

更に翌４５年３月同地において１基が発見され，高崎町教育委員会によって調査されている(2)。現在の行政区は異にしているものの地理的に群として一括されるべきで，総称日守地下式古墳群として差し支えないであろう。

１号は四方に幅広の棚状施設を有した「左片袖」の玄室を持つ。副葬品は豊富で，斧頭，貝釧が注目される。２号は軽石による羨門閉塞であり，日守地区においては数的に限られた「両袖」の玄室である。３号は１号と同じく「左片袖」の玄室構造で，三方に棚状施設を有する。副葬品も豊富で，剣，刀子，鉋，二段逆刺を含む各種鉄鏃が出土しており興味深い。また，旭台において見られた彩色線文が施されており，副葬品の豊富さとともに後の日守５５－２号に共通するものである。

更に１０年を経過した昭和５４年５・６月に道路北側の日守１－１１９番地で，小林地区農業協同組合高原支所の採土作業中に４基が相次いで発見された。４基はいずれも西諸県地方特有の「片袖型」玄室を有し，羨門閉塞形式である。この内１号玄室には仏教建築の影響を示唆する束柱の浮彫がみられ，旭台以来注目を浴びている「装飾」地下式古墳に新しい資料を加えることになった。

日守地下式古墳群発掘調査一覧表

番号		副葬品	閉塞	玄室形式	築造方位 竪坑－玄室	被葬者数	調査年月日	文献
1	仮屋尾1号	剣2，刀子2，斧頭1，鉄鏃9，鉇破片1，鹿角製刀装具破片1，貝釧破片2	羨門 自然石	平入左片袖方形 四方棚　寄棟造	西－東	不明	昭44.12.15	「高崎町仮屋尾地下式古墳調査報告」　宮崎県文化財調査報告書第15集　昭45.3
2	仮屋尾2号	鉾1，刀子2，鉄鏃6	羨門 軽石	平入両袖方形 一方棚　寄棟造？	南－北	不明	〃	〃
3	仮屋尾3号	剣1，刀子6，鉇2 鉄鏃6	羨門	平入左片袖方形 三方棚　寄棟造	西－東	4体	昭45.3.13	高崎町教委調査 宮崎県文化財調査報告書第22集 実測図掲載
4	昭54－1号	不明	羨門 軽石	平入左片袖方形 二方以上棚　寄棟造	西－東	不明	昭54.5.8 ～5.9	「日守地下式横穴54－1～4号発掘調査」　宮崎県文化財調査報告書第22集　昭55.3
5	昭54－2号	刀子1，貝輪1，剣，鉄鏃（詳細不明）	羨門 自然石	平入左片袖方形 二方以上棚　寄棟造	西－東	3体？	〃	〃
6	昭54－3号	剣2，鉄鏃2	羨門 板石	平入右片袖隅丸方形 三方棚　寄棟造	北西－南東	1体	昭54.6.7 ～6.9	〃
7	昭54－4号	刀子1，鉄鏃1	羨門 板石	平入左片袖方形 四方棚　寄棟造	南西－北東	2体？	〃	〃
8	昭55－1号	剣1，鉄鏃2，貝輪4	羨門 自然石	平入左片袖方形 三方棚　寄棟造	南西－北東	3体 （内1体小児骨）	昭55.7.7 ～7.12	「日守地下式古墳群発掘調査（55－1～4号）」　宮崎県文化財調査報告書第23集　昭56.3
9	昭55－2号	剣4，刀子3，鉄鏃16，鉇2，鍬先2，貝輪16	羨門 板石	平入左片袖方形 四方棚　寄棟造	西－東	2体	〃	〃
10	昭55－3号	刀子1	？	平入左片袖方形 一方棚　寄棟造？	北西－南東	不明	〃	〃
11	昭55－4号	なし	羨門 自然石	平入左片袖隅丸方形 四方棚　寄棟造	北東－南西	不明	〃	〃

次いで，昭和５５年７月，前年の継続土取りによって隣接畑地との境界が生じたが，法面に当る部分から４基発見され，高原町教育委員会によって発掘調査が行われた。この４基もともに「片袖」玄室である。１号の埋葬人骨は３体であったが，女性骨の腹部に幼児骨が抱かれるように葬られ遺存していたことは，地下式古墳調査例としては稀有のことであろう。２号の玄室壁面には朱による彩色文があり，４号玄室は全面朱塗りであることなど，地下式古墳研究上「装飾」について再検討する必要があると考えられる。３・４号は副葬品が稀薄で規模も小さく，小児用であろうか。

注１　「九州縦貫自動車道遺跡分布調査報告書」宮崎県教育委員会　昭４４.

注２　黒木昭三氏の報告によると，壁面に彩色文様が見られる。

Ⅲ　調査経過

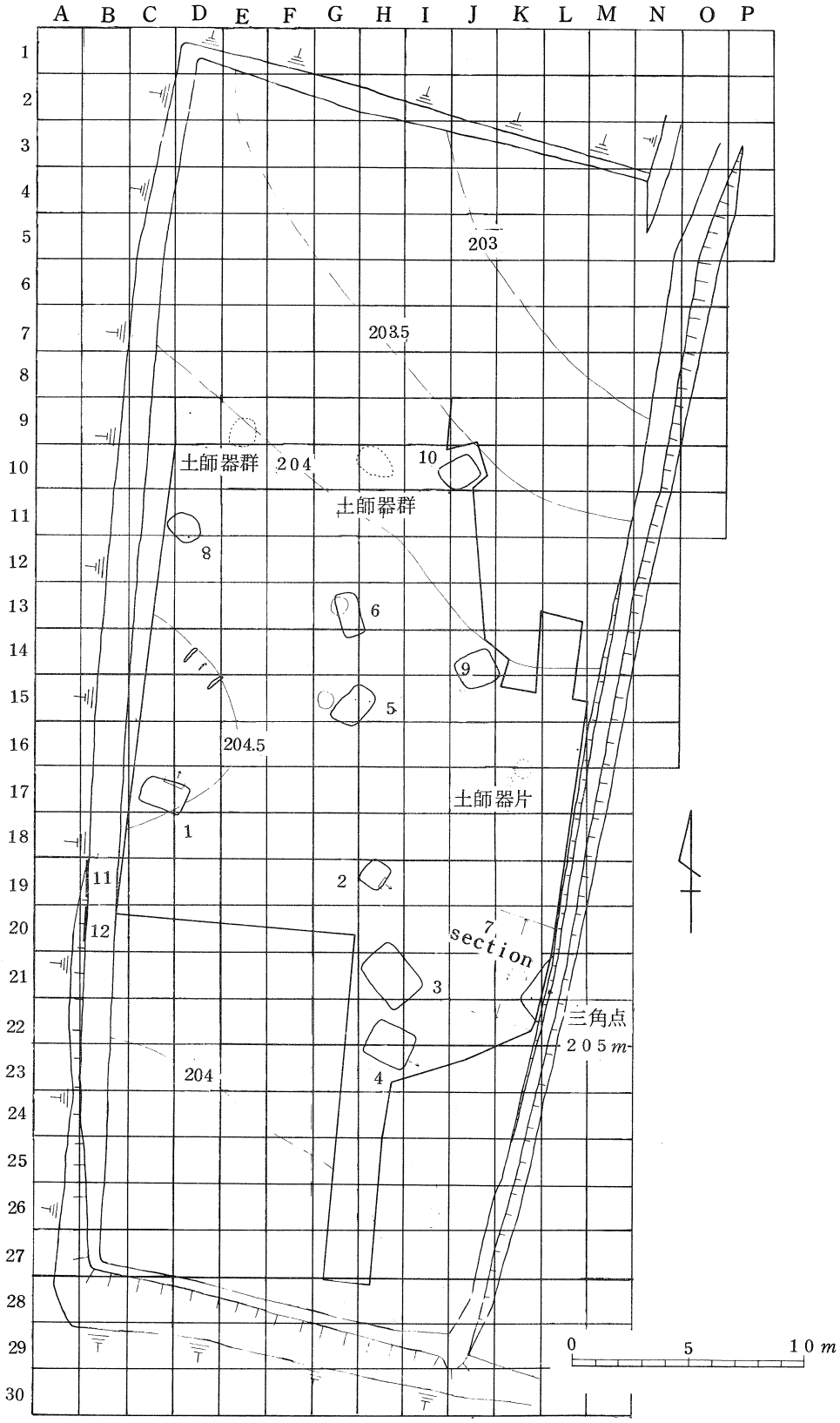
調査は，高原町教育委員会の協力を得て，県教育委員会が調査主体者となり，昭和５６年３月９日から同月１８日まで実施した。調査担当者を文化課主任主事岩永哲夫とし，調査指導として，県文化財保護審議会委員石川恒太郎，寺原俊文，遠藤尚（宮崎大学教育学部教授）の三氏の参加を得た。

なお，調査に際し，土地所有者太鼓稔氏には多大な御協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

調査対象地は，５４・５５年度に発掘調査を行った東側畑地約1,２００m^2（西諸県郡高原町大字後川内１－１１８番地）であったが，結果的には畑地の中央部分約４４０m^2の調査に留まった。それは地形的に畑地の中央部が最も高位で，南北が低くなる蒲鉾状を呈しているため，中央付近においては，竪坑上面までの表土が浅く，容易に位置を確認することができたのに対し，南北方向は耕土に続く黒土層が急速に厚くなって採土が困難となったためでもある。また，中央付近で相当数の竪坑部を確認し得たことで，所期の目的はある程度達したものと考えられ，更に，調査を進める中で竪坑上面及び周辺に土師器の存在を認めることができたこともあり，今回の予定調査期間内では当時のいわゆる墓前祭祀的遺構の確認を含め精査することは不可能であり，周囲について今回は手を加えるべきでないとの判断をなし，前記面積に留めたものである。

Ⅳ　調査結果

調査対象面積約1,２００m^2に対し，地下式古墳の竪坑を検出し，基数把握を目的として調



第２図　日守地下式古墳群分布図（1～12竪坑番号を示す　• 土師器片）

査を行ったが，発掘面積約４４０m^2の内に含まれる基数は１０基であった。しかし，一昨年の採土作業により西側崖面に２ヶ所の遺構断面が観察できたことから，ここでは総数１２基の地下式古墳を確認したと言ってよかろう（第２図）。

竪坑番号は１から１０まで発見順に付している。

１．遺　構

遺構として確認したものは，地下式古墳の竪坑部と不明遺構１ヶ所である。

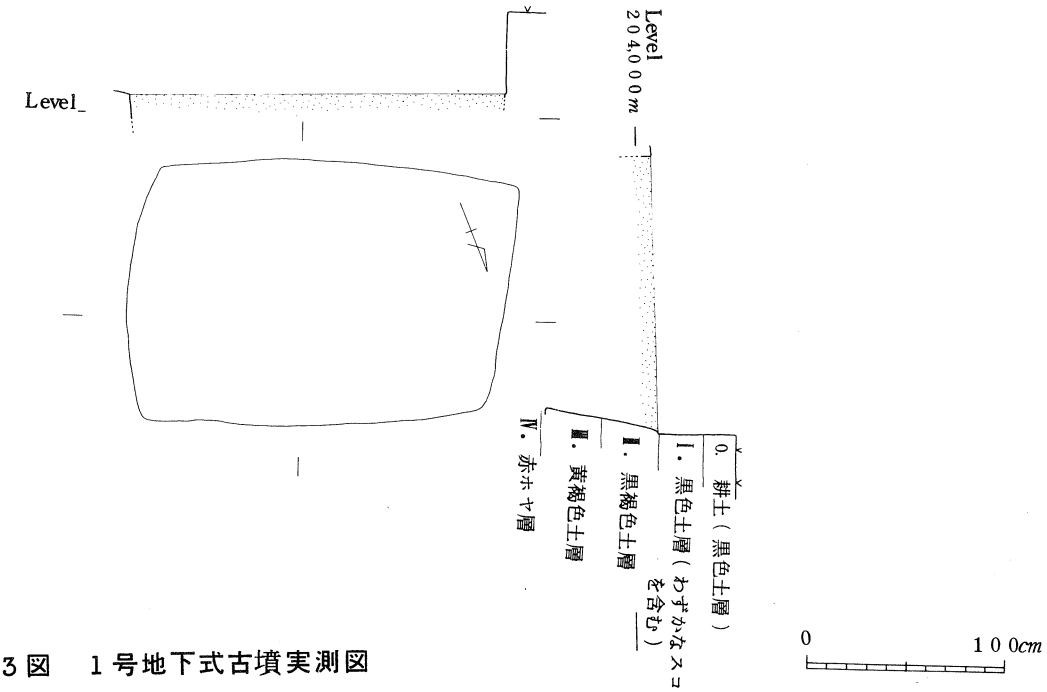
(1)　１号地下式古墳（第３図）

竪坑は長径２００*cm*，短径１３０*cm*の方形状をなし，北側長辺に羨道を穿っている。閉塞石はなく，羨門幅は９２*cm*を測る。竪坑上部に土師器片がみられた。

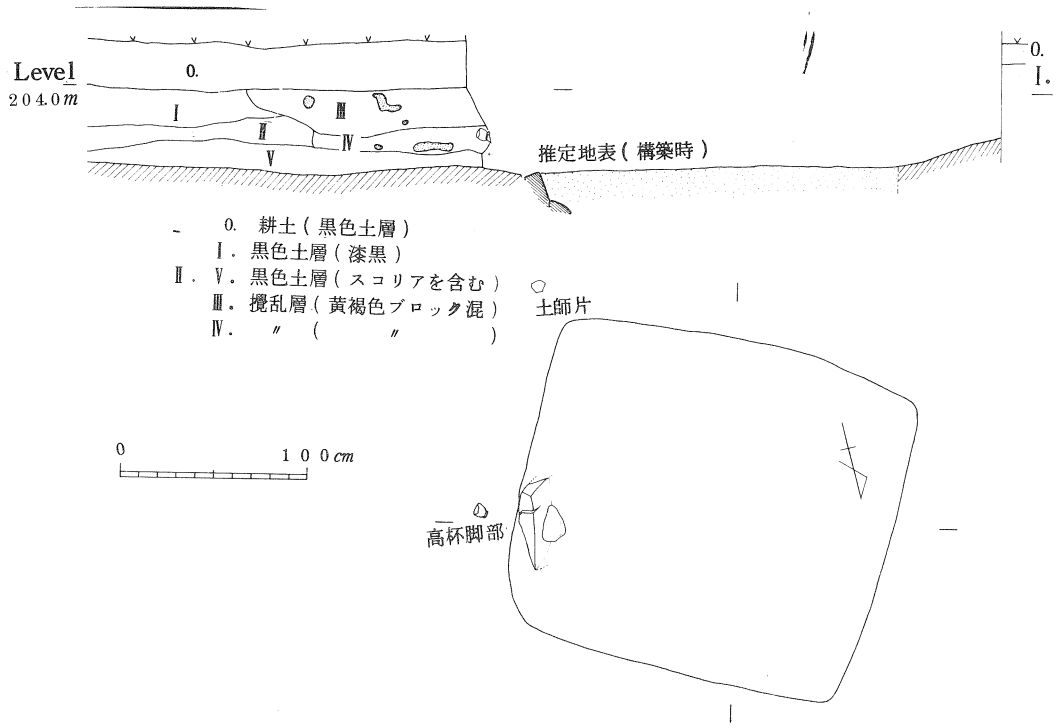
北側断面において，土層を観察すると，０層＜耕土（黒色土層)１６*cm*＞，Ⅰ層＜黒色土層（わずかなスコリアを含んでいる）２２*cm*＞，Ⅱ層＜黒褐色土層２９*cm*＞，Ⅲ層＜黄褐色土層３０*cm*＞，Ⅳ層＜赤ホヤ層（第１オレンジと呼ばれるものである）＞と続いている。竪坑の掘り面はⅠ層途中からと思われる。

(2)　４号地下式古墳（第４図）

竪坑は，長径１９８*cm*，短径１８０*cm*の隅丸方形をなし，南東側の壁に板石が検出されたことから，羨門を閉塞している石であり，同方位に羨門を穿っているものとみられる。表土から竪坑上面まで約７０*cm*を測るが，層位観察の結果，表土下約６０*cm*の黒色土層上面が当



第３図　１号地下式古墳実測図



第４図　４号地下式古墳実測図（竪坑部）

時の地表であり，掘り始め位置であったものと考えられる。

第４図における玄室上部の土層の内，Ⅲ・Ⅳ層中に下層の赤ホヤがブロック状に混在することは，蓋し竪坑掘削により生じた掘り上げ攪乱土であり，現在の畑地に所在するが為に上層は削平され，また一部層序に不明瞭な部分はあるものの，極めて小規模ながらいわゆる盛土（墳丘）の存在を示すものといえよう。更に，閉塞石寄りのⅣ層中に高杯脚柱部が発見されたことも注目すべき事実である。

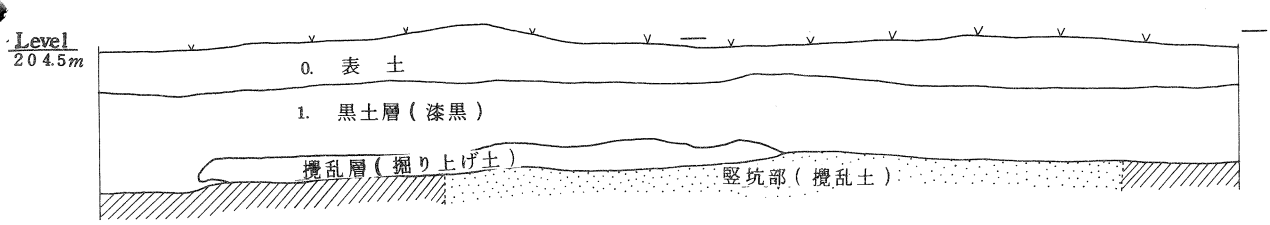
(3)　７号地下式古墳（第５図）

７号竪坑は一段低位の隣畑との境界に所在し，畦に設置されている三角点の真下にあたるため，竪坑の規模は不明である。

４号において見られた掘り上げ土の広がりがⅠ層の途中表土から約４０cmの位置に薄く検出されたが，Ⅰ層は火山灰の自然堆積と思われ，東側断面で観察した限られた範囲内では顕著な盛土と認められるものではなかった。

(4)　不明遺構

１号と８号のほぼ中間地点から剣を中央に埋置し，両側に各長さ８０cm，幅１５cm，深さ３０cmほどの掘り込みを設けた遺構が発見された。竪坑検出を主眼にしていた関係上，十分



第５図　７号地下式古墳　竪坑部壁面実測図

な精査にまで至らなかったが，両掘込み間は約１５０cmを測り，木棺墓と考えるのが妥当かも知れない。地下式古墳群に混在する形での出土であり，墓群構成上興味深い。

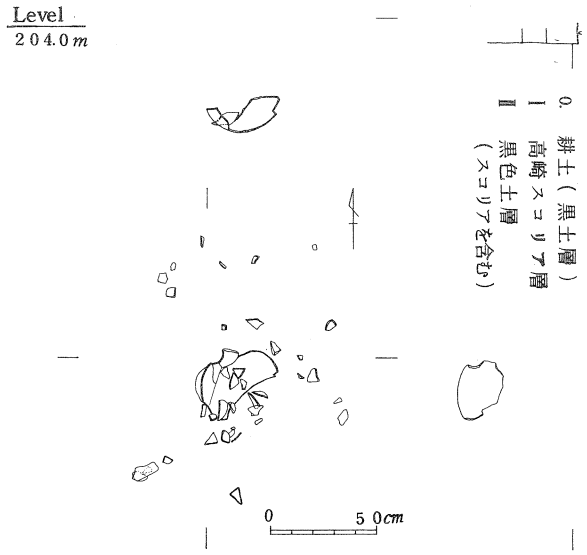
２．遺　物

出土遺物はほとんど土師器であり，他に鉄器４点が出土した。

(1)　土　器

地下式古墳の１号から１０号までの内，２・６号を除いて全ての竪坑上部から土器が検出された。しかし，その多くが破片であり，接合できる破片が比較的距離を置いて出土しているなど原位置を移動している可能性も窺われ，土器と地下式古墳の関係を各々明確に把握するまでに至らなかった。

竪坑外では，Ｅ－９及びＨ－１０区において一定のまとまりをもって出土したが，Ｅ－９区の土器は甕形土器１個体分，Ｈ－１０区は高杯２個体分をそれぞれ中心にしたものであって土器群と言える程のものではない。その他，全域的に土師器片を散見することができた。



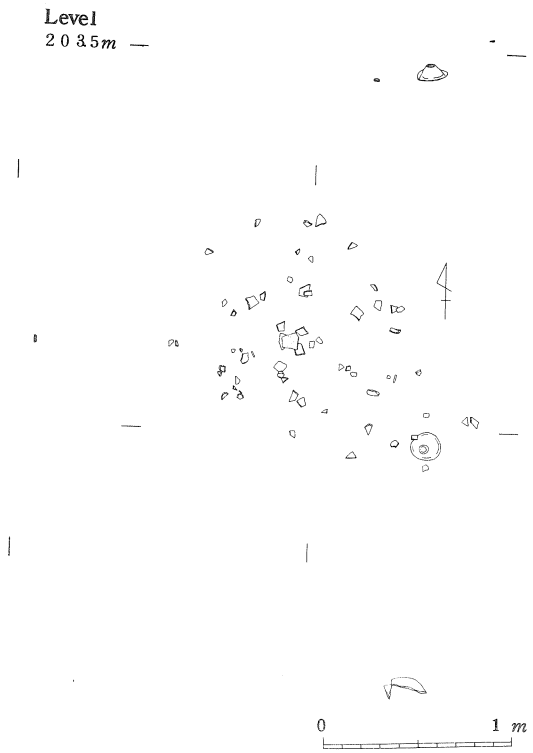
第６図　Ｅ－９区土器群実測図

高　杯　（第８図）

１は４号竪坑上部から出土したもので，

杯部口径１２.０cm，器高９.０cm，脚端部径１３.２cmの端正な小型品である。杯部は緩やかに内湾しながら開き，端部は丸くおさめる。脚柱部は裾部との屈曲を有せず，連続的にラッパ状に開いている。極めて安定感が高い。杯部内面はナデ，外面は斜位に刷毛調整した後，端部は横ナデしている。脚柱部外面は縦位にヘラ磨き，内面はヘラ削りを行い，裾部は外面横ナデ，内面に刷毛調整痕を残している。

２は４号竪坑近くで出土し，接合する破片の一部はＥ－９区出土である。底部から体部にかけて屈曲した杯部であり，推定口径約３０cm，内面はヘラ磨きし，外面は刷毛調整である。３は４号の羨道上部に当るとみられるⅣ層（攪乱層）から出土した脚柱部分である。杯部は前述２ではないかと思われる。外面は縦位のヘラ磨き，内面は縦位のヘラ削りである。

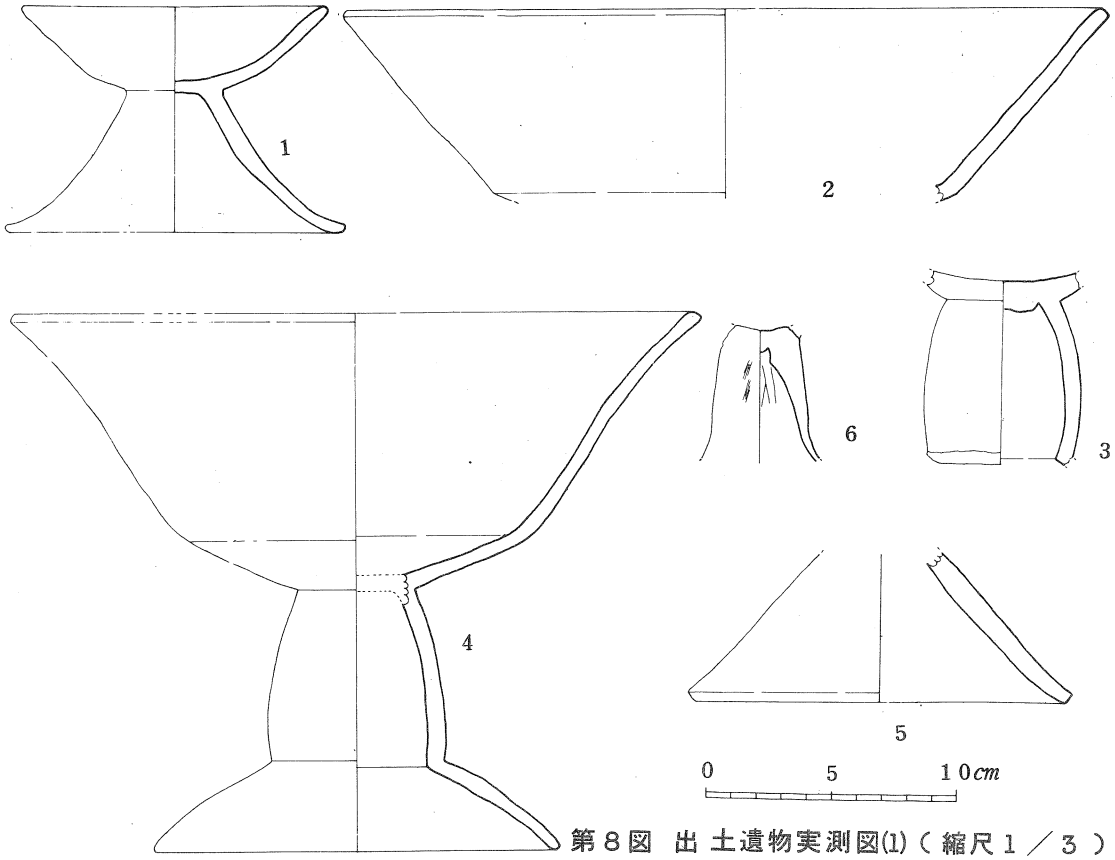


第７図　Ｈ－１０区土器群実測図

４・５はＨ－１０区出土である。４は杯部口径約２７cm，器高２１.５cm，脚端部径１６.０cmを測る。杯部はその下底部に近く弱い稜をつくりだし，大きく外反している。脚柱は杯部との接点で最もくびれ，中膨らみをなし，脚裾部は内湾している。杯内面はヘラ磨きを施しているが，外面は刷毛目痕を斜位に良く残している。脚柱外面は縦にヘラ磨き，裾部も同じくヘラ磨きを行っている。内面は脚柱ヘラ削り，裾部は刷毛目調整である。５は裾部にあたり，脚端部径１５.０cmを測る。焼成が脆いため器面風化がみられるが，内外面とも刷毛調整である。

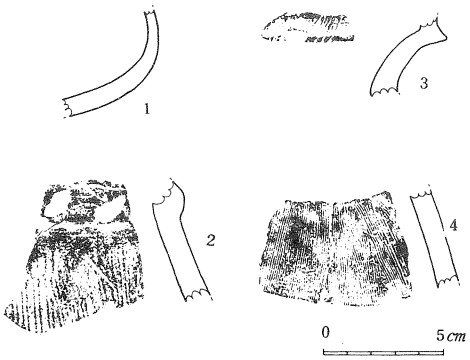
６は小型の脚柱部で外面ヘラ磨き，内面ヘラ削り調整である。焼成普通。

その他の土器　（第９図）



第８図　出土遺物実測図(1)（縮尺１／３）

１はＧＨ－９出土のもので，長頸壺の胴部から底部にかけてであろう。薄手で焼成は脆い。２は９号竪坑上部出土の成川系土器片である。絡縄突帯には布目を有した施文具によって施した斜めの太い押圧痕がみられる。突帯下には縦の刷毛目痕が残っている。焼成は脆く暗褐色を呈する。３・４は安国寺系壺形土器片で，く字形口縁には数条を単位とする条痕を鋸歯状に施文している。胴部は縦に刷毛目調整痕が良く残っている。焼成良好。



第９図　出土遺物実測図(2)（縮尺１／３）

鉄器　（第１０図）

前項において不明遺構とした所から出土した剣２本，鉄鏃２本である。

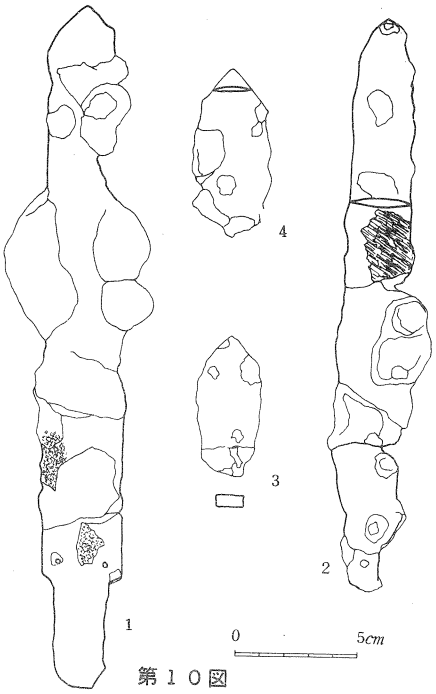
剣　（１，２）

１は総長２７.９*cm*，刃幅３.２～３.５*cm*を測る。関部に近く２個の孔を穿っている。また，一部に布目痕が残存している。

２は総長２３.４*cm*，剣身には木質を銹着している。

鉄鏃（３，４）

ともに鏃身のみで，平根式である。



第１０図
出土遺物実測図(3)（縮尺１／３）

Ⅴ　結　語

今回の日守地下式古墳群分布状況確認調査によって，約４４０m^2の限られた範囲内ではあったが，１２基の存在を確認し得た。この高い密集度は地下式古墳の特徴であり，過去の調査例もそれを示している。この結果は，更に丘陵の南・北・東にも多数存在することを予測させるに十分なものである。先述したように既確認及び既調査の１７基を合わせると，２９基を数え，未確認基数を考慮するならば，えびの市小木原地下式古墳群，島内地下式古墳群，野尻町大萩地下式古墳群に次ぐ県内有数の大地下式古墳群になる。

また，形態的には「西諸県型」とも言える片袖型玄室を主とするが，その発生論，分布構造論を初め，多くの課題が残されている地下式古墳の研究上，重視され得べき内容を持つものであり，量的に確実に減少しつつある現状を顧みても遺跡の取り扱いについては，十分配慮する必要があるものと考えられる。

今回の調査では，竪坑上部及びＥ－９，Ｈ－１０区を中心に土器を検出した。日守における調査例は工事中に発見されて調査したものが全てであり，十分な調査を行う術が失われていたことにもよるが，地下式古墳との関連を知る土器の発見がなかった。玄室内から出土す

るのは日向中央部の地域であり，諸県地方では数少ない。しかし，竪坑上部やその周辺からの出土例は，えびの市灰塚遺跡[1]，小木原古墳[2]，小木原地下式A号墳[3]，馬頭地下式3号[4]，久見迫地下式7号[5]，高崎町縄瀬小学校校庭地下式古墳[6]，高原町旭台地下式3，13号[7]があり，いずれも祭祀的性格を持つものと考えられる。また，宮崎市下北方地下式4号[8]の竪坑上部からも多くの土師器が出土しており，副葬品としての土器との関連で注目される。

日守出土の土師器は完形のものはなかったが，大小の高杯2点が復元でき，出土状況から復元可能な甕形土器が1点あった。第8図4に示した高杯は，国富町六野原地下式3号，22号出土の高杯と共通した特徴を有し，杯部の形態は，灰塚遺跡，下北方地下式4号出土にも類似している。時期的には土師式土器編年の中期[9]，関東地方和泉期に相当するものと思われる。また，第8図1の小型高杯は県内においては出土例がなく，4号地下式古墳との関連の上でも注意すべき遺物である。

次に土器と地下式古墳の関係であるが，出土地点が竪坑上部及び付近のものは当該遺構に関わるものと認められるが，E－9，H－10区出土については，果してどの遺構に伴うものかは速断できず，あるいは遺構をグルーピングでき得るものとするならば，ある特定のグループに対して共通の祭祀土器と考えるのが妥当かも知れない。

また，9号竪坑上部から成川系とみられる絡縄突帯土器片が1点出土している。高崎町上示野原遺跡[10]において出土した高杯は日守出土の高杯に類似し，共伴する遺物として絡縄突帯甕形土器の出土がみられたことは，絡縄突帯土器を伴う住居跡と地下式古墳との関係を示唆しているようにも思われる。

注1.　17号地下式古墳（竪坑上部閉塞）の蓋石上から高杯が出土し，周辺からも高杯の杯部が出土している。

「灰塚遺跡」　九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(2)　宮崎県教育委員会　1973

注2.　円墳であるが，盛土中に主体部は認められず，地下式古墳を主体としている。

「小木原古墳」　九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(1)　宮崎県教育委員会　1972

注3.　「小木原地下式A号墳」注2.同書

注4.　「馬頭遺跡」注2.同書

注5.　「久見迫遺跡」注2.同書

注6.　「高崎町縄瀬小学校校庭の地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書第16集　宮崎県教育委員会　昭47.3

注 7.　旭台出土土器については，報告されていないが,地下式第3，１3号の竪坑部から出土している。機会を得て報告する予定である。

「旭台地下式古墳群発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第１９集　宮崎県教育委員会　昭５２.３

注 8.　「宮崎市下北方町地下式古墳調査報告」宮崎県文化財調査報告書第１６集　宮崎県教育委員会　昭４７.３

注 9.　「土師式土器集成」本編２　杉原荘介・大塚初重編　昭４６

注10.　「上示野原遺跡発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第２２集　宮崎県教育委員会　昭５５.３

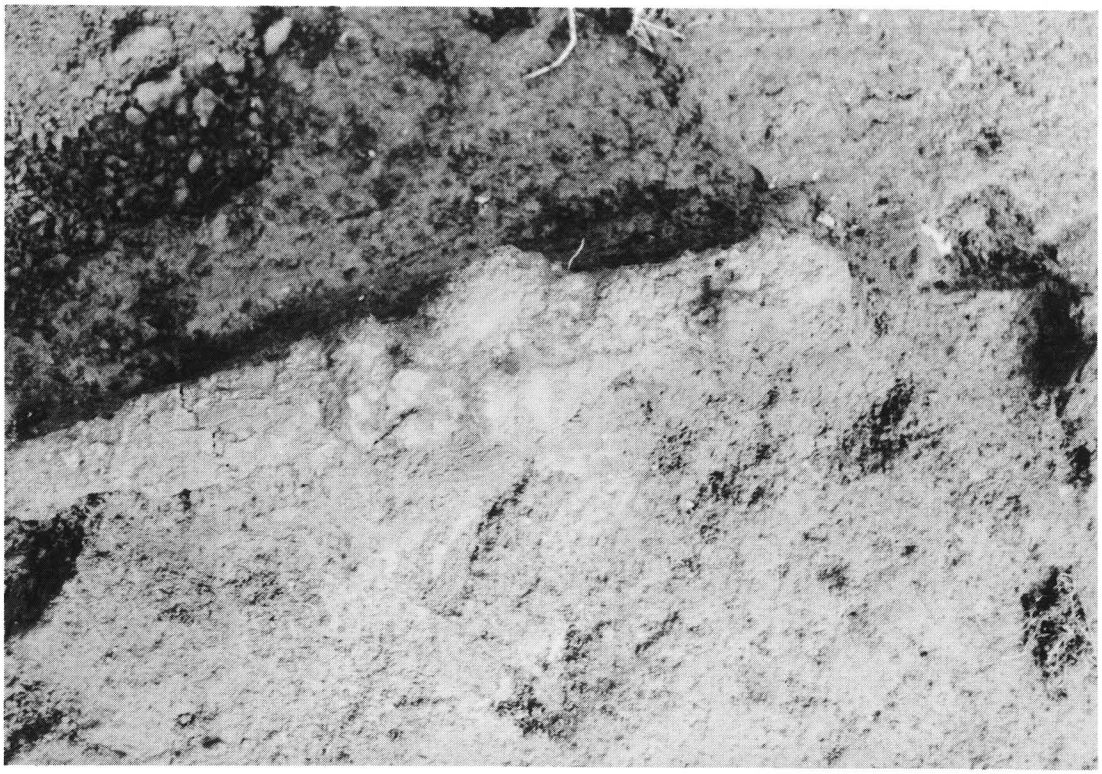
(1) 遺 跡 遠 景

(2) 発 掘 作 業 状 況

（1）1 号地下式古墳竪坑

（2）2 号地下式古墳竪坑

（1）3号地下式古墳竪坑

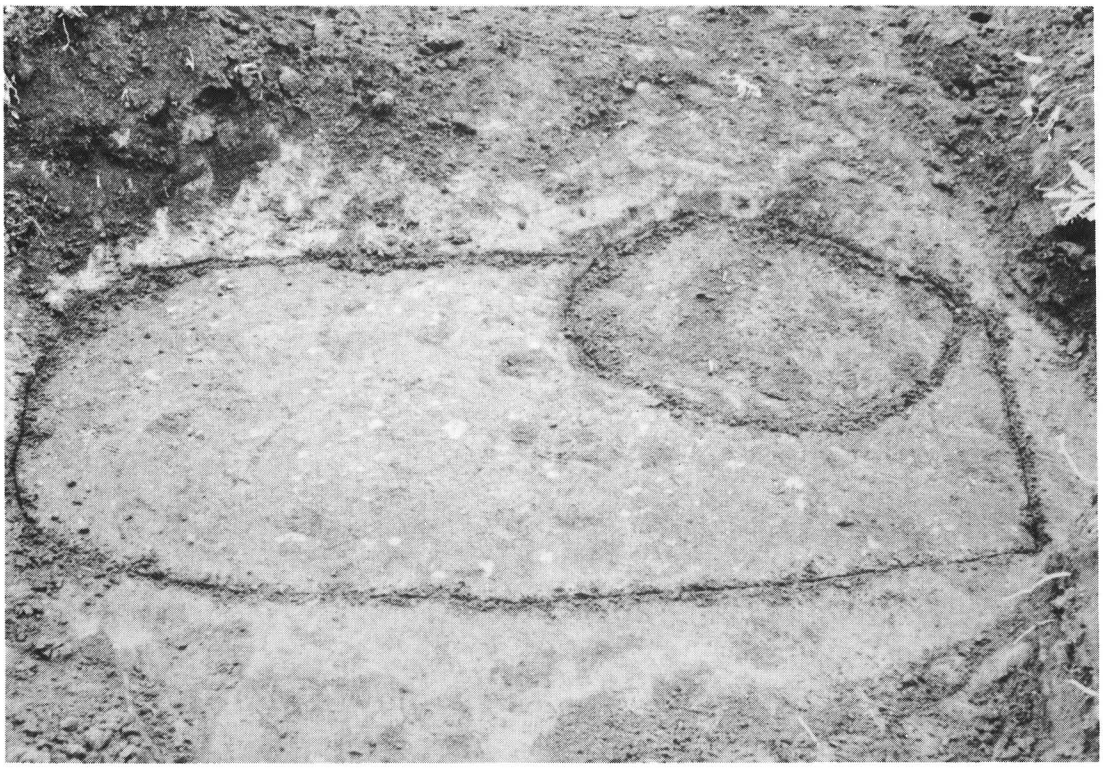


（2）剣　出　土　状　況

（1） 4 号地下式古墳竪坑

（2） 4 号玄室上部土層状況

（1） 5号地下式古墳竪坑



（2） 6号地下式古墳竪坑

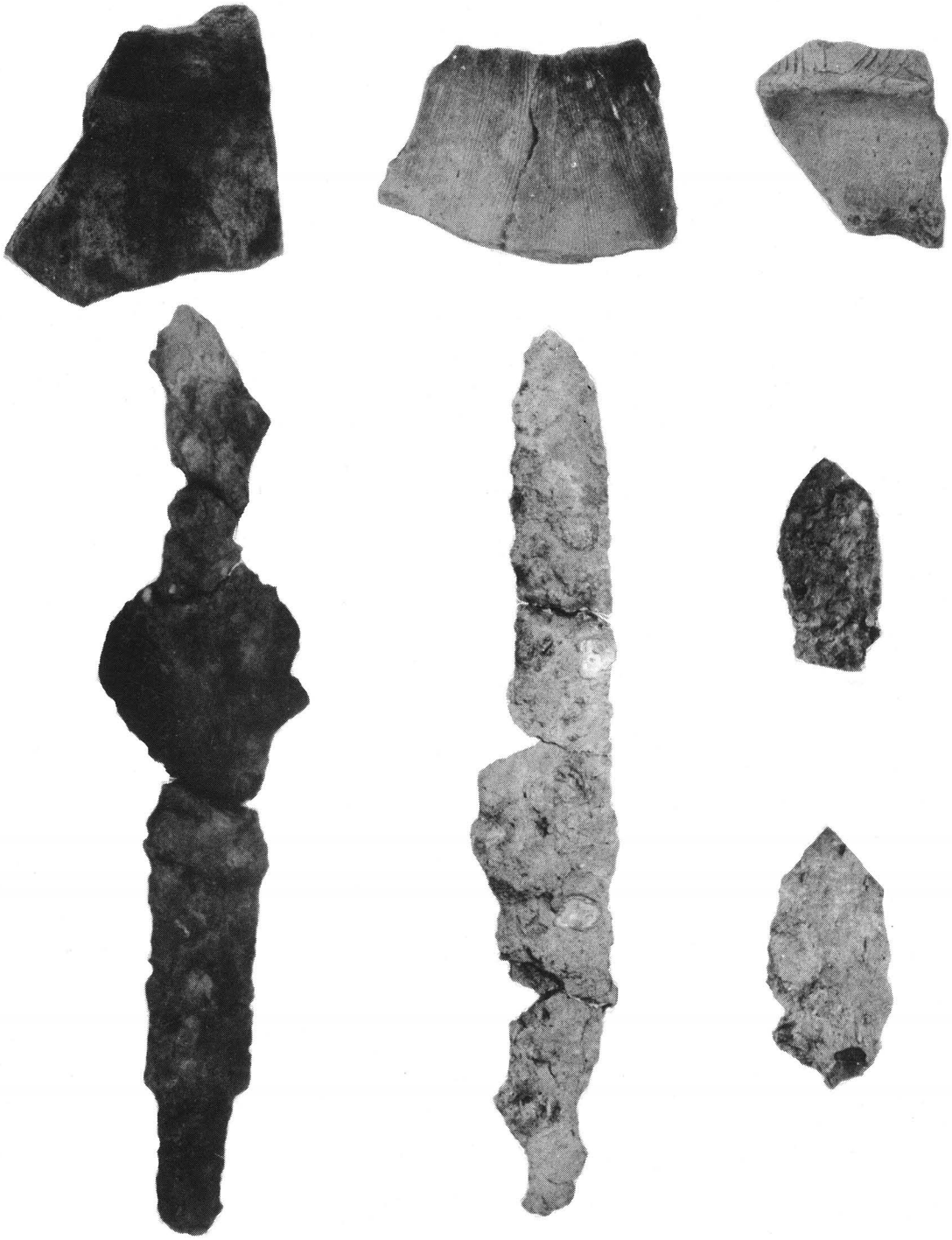
（1）7号地下式古墳竪坑

（2）高　杯　出　土　状　況（H－10区）

甕 出 土 状 況

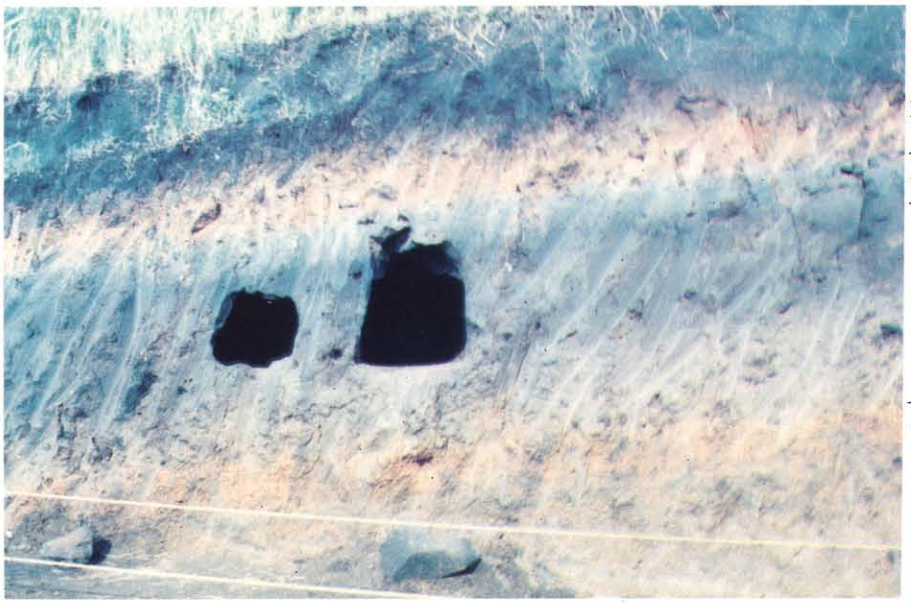
図版 8

出 土 遺 物 （1）



出 土 遺 物 （2）

1. 遠　　景



2. 近　　景

（付論）

宮崎県西諸県郡高原町日守遺跡の地形的・地質的背景

宮崎大学教育学部　　遠　藤　　尚

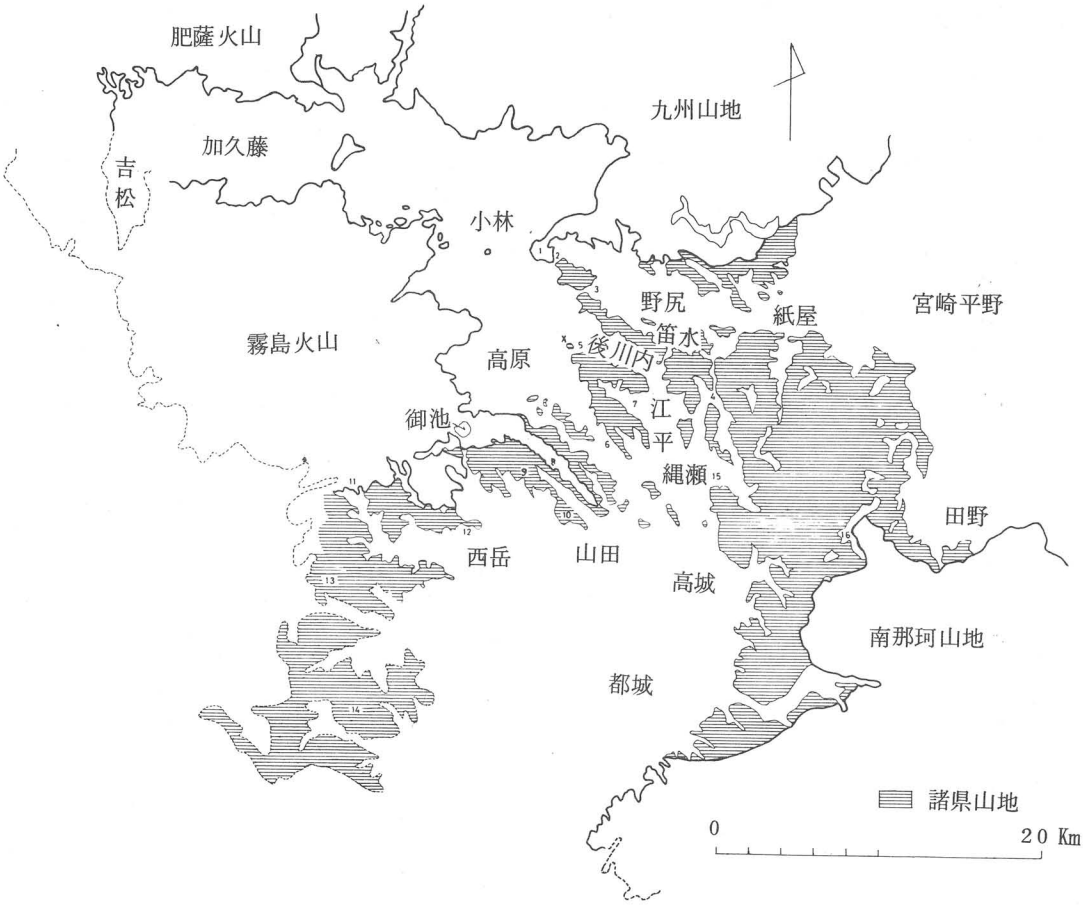
1．はじめに

日守遺跡は，高原から後川内へ通ずる道路の北側，町の中心から東に約4Kmの地点にある。この地点で，人骨を伴う地下式古墳が発見され，最初に調査が行なわれたのは1979年5月であるが，81年3月の古墳群確認調査に際して，現地を見学する機会を得たので，その結果を報告する。

この報告では，群をなす古墳を残した人達の生活の場という観点から，かなり広い範囲について記述した。日守遺跡の近傍については，詳しい野外調査ができなかったので，岩瀬川の北側（野尻町），小林－高原間の国道221号線の西側，および高城町・都城市周縁での知見を土台として，空中写真の実体視から判断した。

空中写真は4万分の1密着を使用し，判読結果を2万5千分の1地形図に記録したものを，5万分の1地形図に縮小転写した。使用した地形図は，5万分の1「野尻」・「霧島山」，2万5千分の1「高原」・「日向小林」・「高崎新田」・「高千穂峰」である。

この調査に際して色々お世話いただいた，高原町教育委員会森長弘・宮崎県文化課岩永哲夫の両氏にお礼申し上げる。



第１図　宮崎県西・北諸県地方の山地と凹地

遠藤・他：２０万分の１土地分類図（宮崎県）より．

破線部は，米谷・他による　同上（鹿児島県）より．

１：岡ノ城，２：瀬戸ノ口，３：猿瀬，４：轟，５：霞原，６：高崎新田，７：木下，８：長尾山，９：星尾山，１０：四方面山，１１：荒襲，１２：尾首山，１３：瓶臺山，１４：白鹿岳，１５：有水，１６：青井岳，×：日守遺跡．

2．遺跡周辺における山地と凹地の配列

宮崎県の北半部を占める九州山地と，南部にある南那珂山地とは比較的高峻（しゅん）であるが，これら両山地に挾まれて，比較的起伏の小さな地帯が拡がっている（第1図）。

この小起伏地帯の基盤を構成するものは，南・北の両山地と同じく四万十帯に属する岩層であるが，かなり擾乱（じょう）を受けていて，鱗片状の辷り面が発達した，剪断泥岩ともいうべき頁岩が優勢な地層であって，比較的低い（海抜３００～４００m以下の）丘陵状山地を作っている。この丘陵状山地を諸県山地と呼ぶ。

九州山地は野尻町附近で南に張り出し，南那珂山地は青井岳附近において北に張り出している。これら二つの張り出しに挾まれた部分の諸県山地は，その北端部で，東西にわたって断ち切られてはいるが，紙屋から青井岳までつながって，その東方に拡がる宮崎平野の西縁を画している。都城から北流してきた大淀川は，上記の断絶部で，岩瀬川を合せるとともに向きを東に変えて，宮崎平野の西縁部に開口している。

大淀川の北流部分より西の諸県山地は，北西から南東に平行して走る多くの谷や凹地帯に断たれ，北西－南東に細長く続く山背を平行させながら，全体として北東から南西に雁行して連なり，瓶臺山－白鹿山の連山とつながって，都城・国分・小林の３凹地帯の境となっている。そのうち最も北東にあるものは，前記した九州山地の張り出した部分の西端に位置する岡ノ城と，瀬戸ノ口の鞍部で接し，岩瀬川・高崎町江平－笛水の鞍部・大淀川などで断ち切られながらも南東に伸び，先に述べた紙屋－青井岳の山地に続き，九州山地との間に野尻の盆地を抱いている。岩瀬川・大淀川がこの山地を貫流している所には，猿瀬・轟の狭隘（あい）部がある。

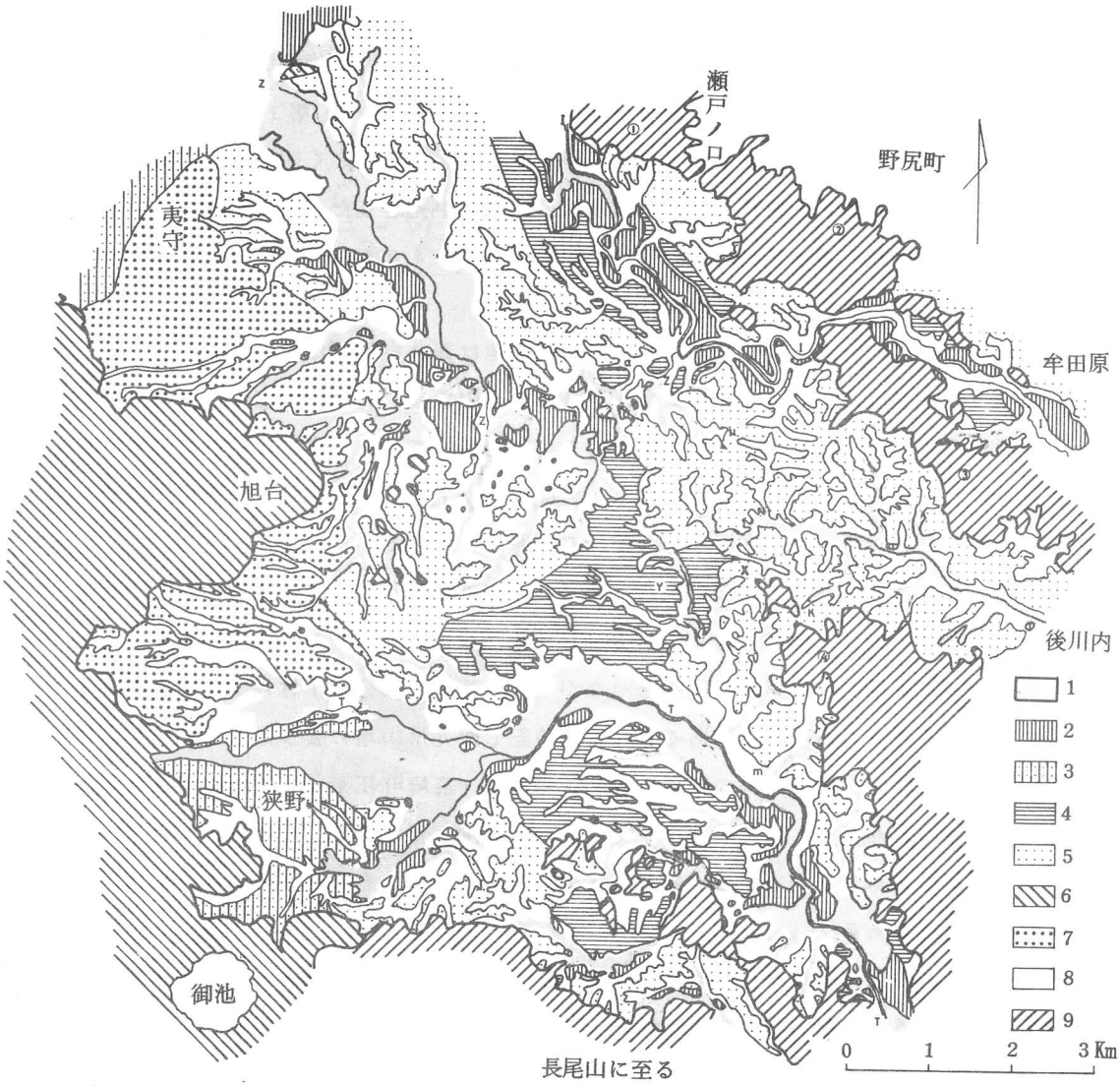
第二の列は，高原町霞原から高崎新田の東方に続くもので，第一列との間に後川内の凹地帯を挾んでいる。この山列は南東に向かって分岐し，木下などの谷を挾むとともに，断片化し，江平・縄瀬の低所を抱きながら，都城の盆地に移り変っている。日守遺跡は，この山列の北西縁に位置している。

高崎川に沿う凹地帯で第二の山列から隔てられている部分の諸県山地は，南西に向かって高度を増しながら，長尾山・星尾山－四方面山など山田町の北部を占める第三列，都城市西岳町の北部を荒襲から尾首山に続く第四列を経て，瓶臺山（５４３０）に至る。

この部分の諸県山地の北西縁は，霧島火山の熔（よう）岩流に接するか，または覆（おお）われている。霧島火山は，ここから北および北西に連なり，前記した山地との間に，小林－高原の凹地を抱いている。九州山地の西端には，台地性熔岩を乗せる肥薩火山の一部があって，霧島火山との間に加久藤－吉松の凹地を作っている。

3．凹地域の埋積

山地の特徴が斜面であるとすれば，凹地域の特徴は，各種の平坦(たん)面にあるといえる。この



第２図　日守遺跡周辺の地形・地質区分図

１：低地（氾濫原および谷底の平地），２：Ⅱ面（河岸段丘），３：Ⅱ面と同時の扇状地面），４：Ⅲ面，５：Ⅲ面（シラス台地面），６：霧島火山熔岩類，７：Ⅳ面に当る扇状地面，８：台地・段丘の斜面，９：四万十層群よりなる山地

Ⅰ：岩瀬川，Ｔ：高崎川，Ｚ：辻ノ堂川，ｈ：広原駅，ｔ：高原駅，ｍ：日向前田駅，ａ：阿母ヶ平，Ｙ：横打，ｋ：霞原，ｕ：梅ヶ久保，Ｘ：日守遺跡

①：三角点３６５.３ 岡ノ城，②：三角点３４２.１，③：三角点２９３.８，④：三角点３４８.９

地域で著しく目につく平坦面はシラス台地面である（第２図）。この地域でシラス台地を作っているシラス層は，主として，姶良火山噴出物のうち末期の入戸（いと）軽石流堆積物であって，測定された噴出年代は幅があるが，１６,３５０±３５０～２６,０００±６９５ C^{14} 年前とされている。

第三紀の終り頃，四万十帯に属する岩層から構成された山地が分裂・断片化して，その間に凹地が形成され始めてから以来，これらの凹地は各種の堆積物で埋積されてきた。山地の麓には扇状地が作られ（都城凹地の東半部・紙屋の東方など），凹地の中心には湖成層が堆積した（野尻－紙屋，および加久藤－吉松など）。そのほか，小林軽石流（野尻－紙屋）・加久藤火砕流（小林・紙屋・都城・財部・国分）など，大規模な火山活動に伴う噴出物が広い範囲にわたって堆積するとともに，霧島火山の麓（蓮太郎温泉・柿川内など）では，旧期の活動に伴う噴出物が流下・堆積した。このようにして凹地が埋積されて来た最終段階が，入戸軽石流の堆積であり，その結果，相隔てられた凹地底が，略々同じ高さをもつシラス層によって埋めつくされた。この面をⅢ面と呼ぶ。

シラス層の堆積直前に，旧い霧島火山の東麓には扇状地が作られており，小林市夷守から高原の西部にかけて，現在でも開析扇状地として残存している（高原扇状地）。夷守岳の形成はその直後であり，その噴出物（夷守スコリア）は高原扇状地の表面を覆っているほか，遠く東方の宮崎平野地域にも分布している（宮崎平野では，これを「オコシ」と呼んでいる。）。入戸軽石流堆積物の表面はⅢ面を作っているが，その基底は，夷守スコリアを敷いて高原扇状地にのし上っている。従って，高原扇状地の形成はⅢ面より古い（これをⅣ面とする）。高原扇状地の西方にある旭台・瀬田尾の台地は，熔岩流よりなる台地であるが，この熔岩流は高原扇状地の上に乗っており，末端部の熔岩流の間に，入戸軽石流の基底に伴う軽石層（大隅降下軽石層）を挾んでいるので，これらの熔岩台地の形成は，Ⅲ面の形成と略々同時期である。大隅降下軽石層直下の黒泥を使って測定された年代は２２,０００±８５０ C^{14} 年前であり，先に記した入戸軽石流の測定年代の上・下限の中間の値を示している。

４．凹地底の段丘化

凹地を埋めたシラス層は，その後，流水による開析を受け，シラス台地が形成されるとともに，川沿いには段丘が作られて来た。

Ⅲ面の現在の海抜高度は，大体のところ，次の通りである。加久藤（３００ m），小林・高原（２２０ m），梅ケ久保（２００ m），日守遺跡（１９５ m），後川内（１８０ m），江平（１６０ m），都城（２５０ m），高崎新田（１７０ m），瀬戸ノ口（２００ m），野尻

（１７０ｍ）。大観して，南から北に，西から東に徐々に低下している。たゞし，ここでⅢ面としたものには，シラス層の堆積した表面がそのまゝ残っているものと，いくらか流水に洗われて，シラス層の上に薄い砂礫層を乗せているものとがある。上記したⅢ面の傾きは，一つには軽石流の流下方向を反映しているのであろうが，他方では，その表面を洗った流水の流下方向をも反映しているものと考えている。

都城・高城から高崎にかけて，Ⅲ面より一段低い位置に，かなり広い分布を示す平坦面がある。都城の周辺では，シラス層の上に，厚さ１０ｍ以上の，シラス層から由来した砂・泥層が乗って，シラス台地より一段低く，平坦な台地を作っている（月野原・蓑原など）。この地層を成層シラス層，その台地を成層シラス台地と呼んでおく。

成層シラス層は，シラス層が堆積した後，都城地域に生じた浅い湖の堆積物であるが，シラス台地や山地に近づくと，薄くなり，三角洲性あるいは扇状地性の礫層に移り変る。成層シラス層・成層シラス台地の存在は，高城町有水・高崎町縄瀬まで，野外で追跡し，確認しているが，それ以北については，現在の所，野外での資料をもたない。たゞ，空中写真の実体視によって，Ⅲ面より幾らか低い平坦面の存在が認められる。この面は，湖底面というよりは，Ⅲ面を少し削った河床面あるいは扇状地面のように見受けられるが，都城地域の成層シラス台地面に対応するものであろうと考えている。第２図には，この面はⅢ′面として図示してある。第２図の範囲では，Ⅲ′面に乗る成層シラス層に当るものは薄く，その下にはシラス層があるので，Ⅲ′面はⅢ面とともに，広い意味でのシラス台地面と見做すことができよう。

この地域におけるⅢ′面の，大体の海抜高度は次の通りである。加久藤（２８０ｍ），小林（１９７ｍ），高原（２１０ｍ），梅ヶ久保（１８０ｍ），日守遺跡（１８８ｍ），後川内（存在を認めず），江平（１５０ｍ），都城（１７０－１６０ｍ），高崎新田（１６０ｍ），瀬戸ノ口（柿川内で１７９ｍ），野尻（１６０ｍ）。Ⅲ面との比高は，かなり大きい都城附近（９０～８０ｍ）を除き，一般に２０～１０ｍである。

Ⅲ・Ⅲ′面は流水によって侵蝕（しんしょく）され，台地を貫流する河川の両側や，台地に喰い込んでいる谷床に，平地が形成されている。これらのうち最低位にある平坦面をⅠ面とする。Ⅰ面は，一般に沖積（ちゅう）面と呼ばれているものである。河川の両側では，高崎川，および温水以北の辻の堂川に沿って広い氾濫原が形成されているほか，霧島火山の麓では扇状地的性質を示している（辻の堂川湾津附近・高崎川蒲牟田および湯の元附近など）。

シラス層の下には，夷守スコリアを伴う火山灰層（古期ローム層）が水平に敷かれていることがあり，この場合，古期ローム層に沿って，Ⅰ面が形成されていることが多い。また，

古期ローム層が地面と交わる所には，往々にして湧水があり（例えば小林市千谷），また，シラス台地に喰い込む谷の奥でも，このタイプの湧水が少くない。

Ⅲ′面以後，Ⅰ面以前に形成された段丘面をⅡ面とする。これには，沖積面からの比高が違う幾段かの面があるが，第2図では一括して示してある。Ⅱ面としたもののうち高位のものは洪積世に形成されたが，低位のものの中には，沖積世に作られたものもあると考えている。

Ⅱ面は，岩瀬川・温水附近の辻の堂川・高崎川にそって発達しているが，細野や狭野附近には，Ⅱ面に当る扇状地も作られている。

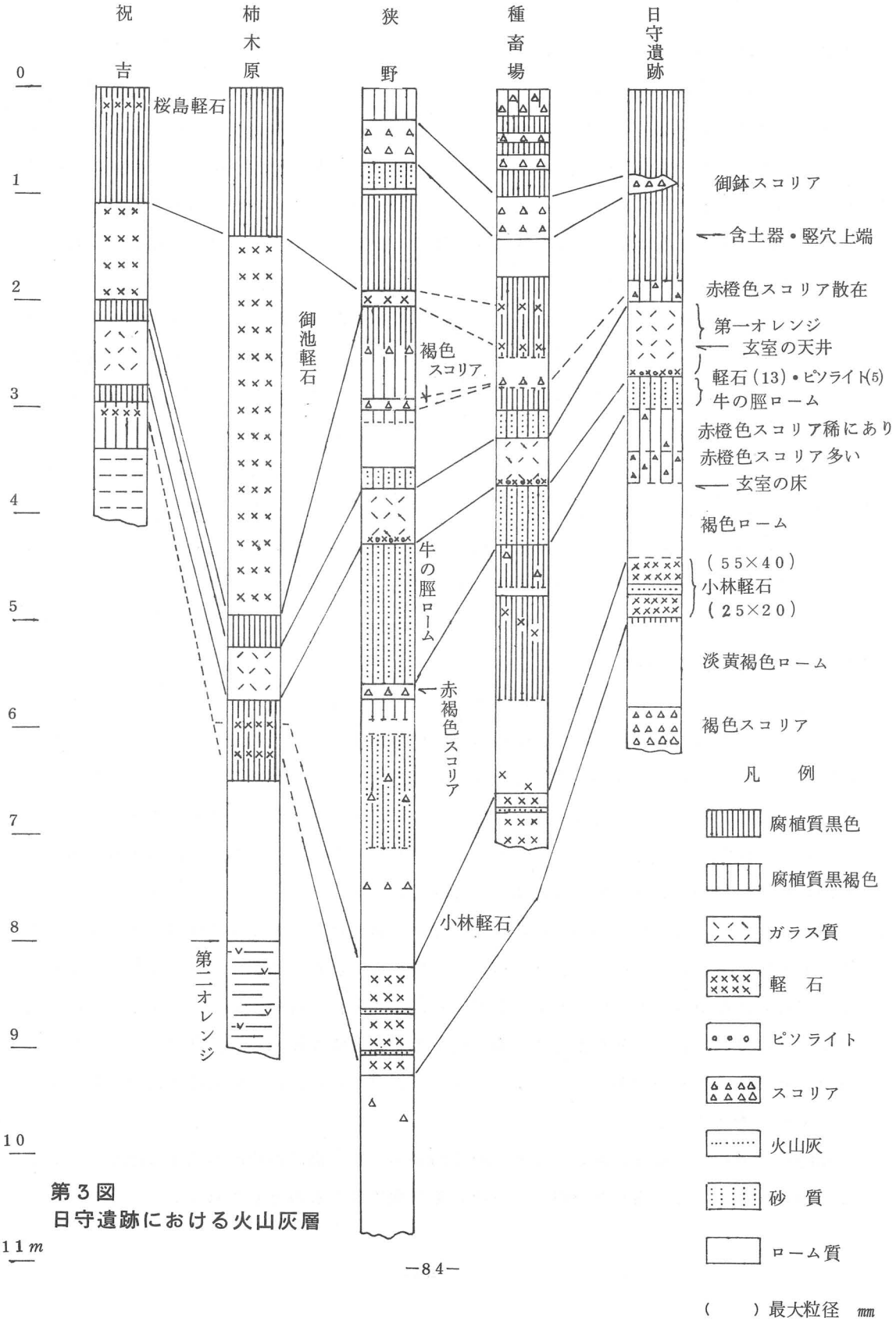
以上を要約すれば，凹地埋積の末期に，現在の霧島火山東麓に当る所に扇状地があり（高原扇状地），夷守火山の活動・形成の後，姶良火山の活動による軽石の堆積（大隅降下軽石層）につぐ軽石の流下（入戸軽石流）によって，凹地の埋積は完了した。流水の洗い流しによってⅢ面－Ⅲ′面が作られた後，河川の下刻作用が強まり，川沿いに段丘を残しながらのシラス台地化と，小谷によるシラス台地の蚕食が行われつゝ，最低位のⅠ面が形成された。Ⅰ面は一般には氾濫原性の面であるが，細野・狭野附近では，扇状地的性格を示している。第2図の範囲内の岩瀬川に沿っては，Ⅰ面は殆ど発達していない。日守遺跡の古墳群が作られた当時の地形は，略々現在の地形に近いものであった。

5．日守遺跡について

日守遺跡は，岩瀬川と高崎川との間に挾まれたシラス台地上にある。このシラス台地は，西方には高原の街区を経て高原扇状地に，東方には後川内のシラス台地に連続してはいるが，台地面は，細かく分岐しながら細長く伸びる谷で刻まれているために，複雑な平面形を呈している。これらの谷のうち遺跡の近くにあるものは，後川内の凹地を流れる炭床川の谷とその支谷，高崎町谷川附近から北に伸びる谷とその支谷であって，その谷底にはⅠ面に属する平地が細長く続いており，現在は水田として利用されている。

遺跡附近にあるシラス台地の表面は，完全な平坦面ではなく，僅かな傾斜をもつ緩やかな凹凸（おうとつ）を示しており，古墳群はその凸部の一つに作られている（図版－1）。遺跡の南東には，第二列目の諸県山地があって，その平面形から，谷や尾根を持つ山地の下半部が，シラス層によって埋没していることが推定される。従って遺跡近傍の緩やかな凹凸は，シラス層下に埋没した古い地表面の凹凸を反映したもので，凸部の下には，古い地表面の凸部が埋まっているものと考えている。

遺跡の西方には，幾らか低い，より平坦な面があって，高原の街区の南まで拡がっている。この面の性格は，よく判らないが，今の所，Ⅲ′面に当るものとしておく。



第3図
日守遺跡における火山灰層

地下式古墳は，シラス台地をおゝう火山灰層（新期ローム層）の中に掘られている（図版－２）。第３図には，現地で見られる火山灰層の断面に，８０年７月に発掘された玄室の位置と，今回確認された竪穴上端の位置とが記入されている。

このうち，第一オレンジとしたものは，俗にアカホヤと呼ばれているもので，その測定された年代は，6,０５０±１１０～6,４００±１１０C^{14}年前とされている。御鉢スコリアの年代は未定であるが，７８８年に黒色のスコリアを２尺ほど，近郊に堆積したことがあるといわれる。

第３図には都城市祝吉（Ⅱ面）・山田町柿木原（Ⅲ面）・高原町狭野（Ⅱ面）および高原種畜場（Ⅳ面）で見られた新期ローム層の断面を附け加えてある。柿木原の第二オレンジは，姶良Ｔｎ火山灰と呼ぶ向きもあるが，Ⅲ面およびⅢ′面の特徴となるものである。日守・種畜場で見られる小林軽石はⅡ面を特徴づけるものであるが，柿木原・祝吉では不明瞭である。祝吉・柿木原で見られる御池軽石は，高原町狭野あたりまで明瞭であるが，種畜場・日守では不明瞭である。御池軽石層の中からは，縄文後期の土器が出土したという。

そのほか鍵層になりそうなものに，御鉢スコリア上の２～３枚のスコリア層（種畜場），御池軽石と第一オレンジとの間の褐色スコリア層（狭野），牛の脛ロームの下の赤褐色スコリア層（狭野），小林軽石の下の褐色スコリア層（日守）などがあるが，それらの噴出源や噴出年代については未定である。特に上位のものについては，今後この地域で出土する遺物との対比が期待される。

日守遺跡において，地下式古墳の竪穴上端と，それに伴う遺物の包含層は，御鉢スコリア以前，第一オレンジ以後（恐らくは，狭野における褐色スコリア以後）の黒色土の中にあって，見るべき鍵層が欠落している。遺物包含層の下位にあると思われる御池軽石も，はっきりしていない。たゞ，遺物包含層の上と下とでは，肉眼的に僅かな違いが感ぜられる。その違いは，たゞ何となく違っていて，言葉では表わし難いのであるが，例えば，土を一つまみ指先に採り，白紙になすりつけた際の色調が違っている。

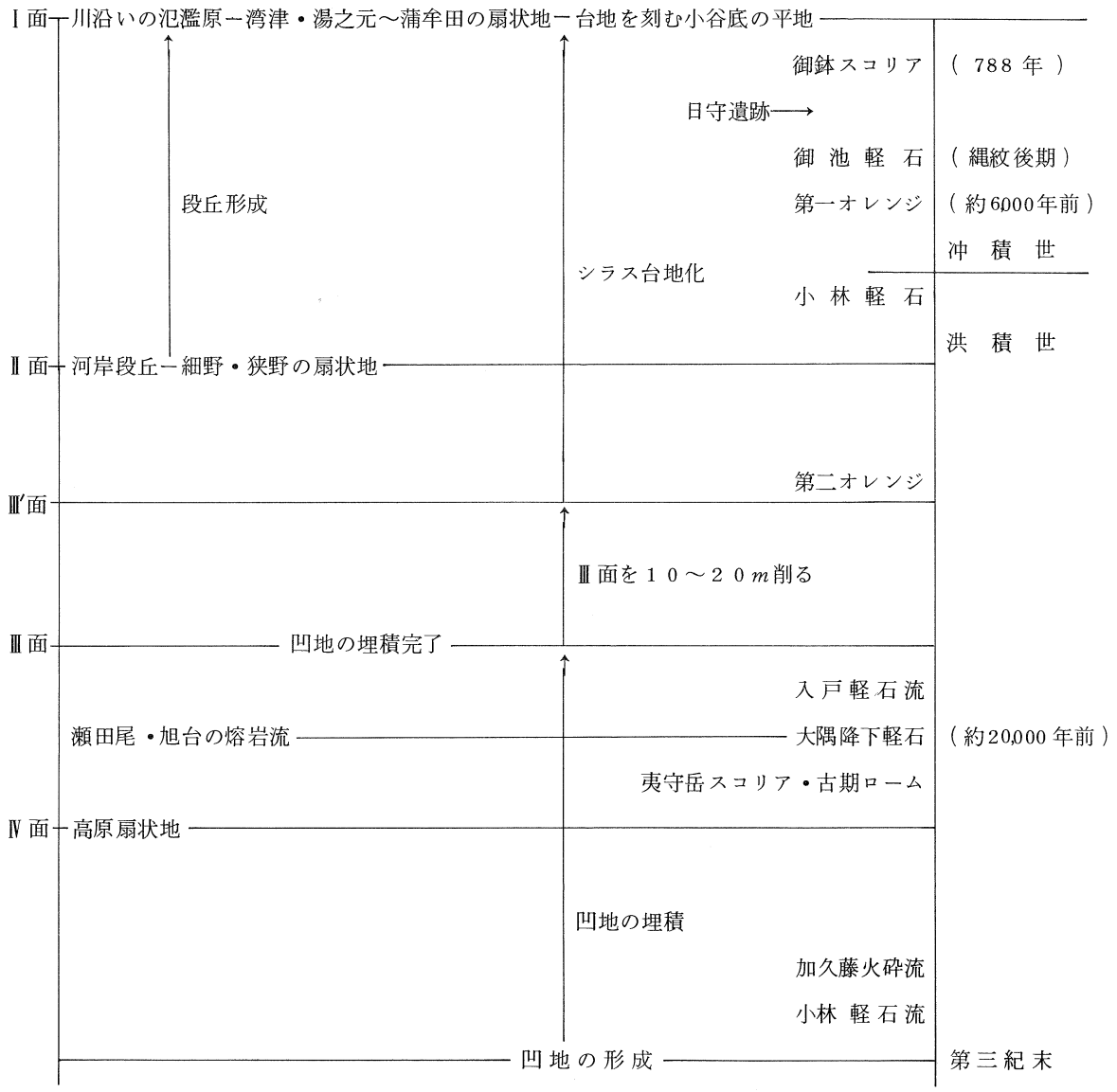
古墳群確認調査のための発掘現場の３箇所で，御鉢スコリア以下の土層断面から，５*cm*間隔で採集した試料につき，標準土色帳と比べて次の結果を得た。前・後の値は包含層の上・下を意味している。（７.５ＹＲ　２／２・２／３），（１０ＹＲ　２／２・２／３），（１０ＹＲ　３／２・３／３）。

概括的には，上はより黒味が強く，下はより茶色味が強いと言える。その理由はよく判らないが，腐植の重合度の違いによるものかも知れない。もしそうであれば，腐植の重合度は，

土層対比の際の一つの指標となるであろう。冲積世と洪積世との境は，略々，狭野における牛の脛ロームの下の赤褐色スコリア附近と考えている。

別表に以上を要約しておいた。

表



参　考　文　献

遠藤　　尚　（１９５８）：宮崎県西諸県郡の段丘堆積物．宮崎大学学芸学部紀要，4.

――――　（１９６３）：宮崎県中部の段丘を覆う火山灰層の層序学的研究．同上，１５～１６．

――――・他（１９６９）：火山灰層による霧島熔岩類の編年（試論）．霧島山総合調査報告書．

――――・他（１９７４）：２０万分の１土地分類図（宮崎県）のうち地形分類図および表層地質図，経済企画庁総合開発局．

伊田一善・他（１９５６）：宮崎県小林市附近天然ガス調査報告．地質調査所報告，168.

宮地六美　（１９６５）：宮崎県西諸県郡高原地方の火山砕屑岩類．九州大学教養部地学研究報告，１２．

成瀬　　洋　（１９６６）：霧島火山東方の第四紀 Tephra. 資源科学研究所彙報，６６．

都北土地分類基本調査研究会（１９８０）：５万分の１土地分類基本調査「都城」のうち地形分類図および表層地質図，宮崎県．

米谷静二・他（１９７１）：２０万分の１土地分類図（鹿児島県）のうち地形分類図，経済企画庁総合開発局．

桑野幸夫・他（１９５９）：大隅半島の地質（予報）．資源科学研究所彙報，４９．

沢村孝之助・他（１９５７）：５万分の１地質図幅説明書「霧島山」．地質調査所．

（１９８１年１０月９日）

梯（かけはし）遺跡発掘調査

西諸県郡野尻町大字東麓４４０－３６番地

例　　言

1．本報告は，昭和５４年２月１３日から１７日まで県教育委員会が実施した梯遺跡の発掘調査報告である。

2．発掘調査は，県総合博物館学芸課主事（現・県教育庁文化課主事）面高哲郎が担当した。

3．本報告の執筆，編集には面高があたった。

本　文　目　次

Ⅰ　所在地 …… 94
Ⅱ　調査に至る経過 …… 95
Ⅲ　調査の結果 …… 95
　1　遺跡の概要 …… 95
　2　遺構 …… 97
　3　出土土器 …… 100
Ⅳ　結語 …… 102

挿　図　目　次

第1図　遺跡所在地 …… 94
第2図　梯遺跡基本層序 …… 95
第3図　遺構分布図 …… 96
第4図　第3，4，10，11号集石遺構実測図 …… 98
第5図　第9，13，19号集石遺構実測図 …… 99
第6図　出土土器 …… 101

図　版　目　次

図版1　(1)　遺跡遠景（北から） …… 105
　　(2)　遺構分布状況（南から） …… 105
図版2　(1)　第2号集石遺構 …… 106
　　(2)　第13号集石遺構 …… 106

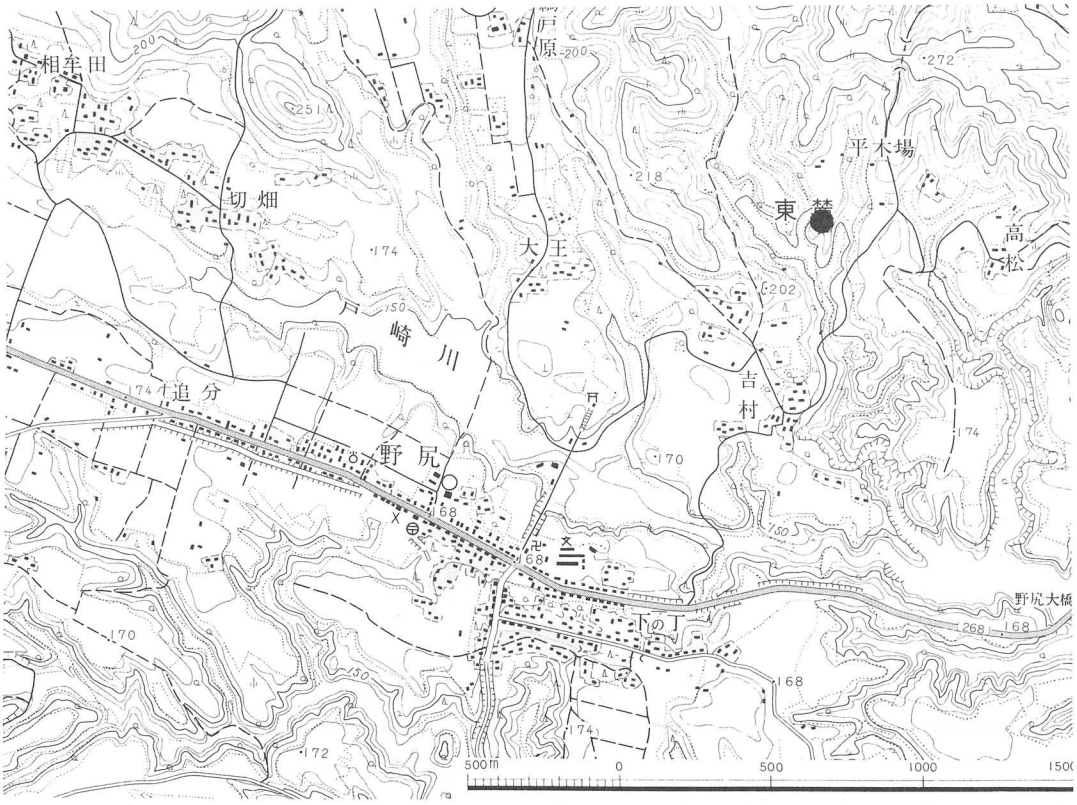
図版３　(1)　第９号集石遺構 …… １０７
　　(2)　第１１号集石遺構 …… １０７
図版４　(1)　第１９号集石遺構 …… １０８
　　(2)　　同　上 …… １０８
図版５　出土土器 …… １０９

Ⅰ　所在地

野尻町は，九州山地の南東裾部にあたり，東は宮崎平野，西は小林盆地に接している。同町内を流れる戸崎川，岩瀬川は，ほぼ東へ流路をとり，北流してきた大淀川と合流して日向灘へ注ぐ。これらの河川により南東裾部は侵蝕を受け，深い谷が形成され，分断化が進んでいるが，その頂部は平担面ないし緩斜面となっており，台地や丘陵性台地が発達している。

梯遺跡は，野尻町役場北東1.5Kmにある標高１７５ｍから１６０ｍへと緩やかに傾斜する丘陵性台地の南端に位置する。

同町内の遺跡には，縄文前期の柿川内第１遺跡[註1]，弥生終末期の集落や土坑墓群[註2]，および多数の地下式横穴の発見されている大萩遺跡[註3]等があり，いずれも台地上や丘陵性台地上で発見されている。遺跡の発見例は現在それほど多くはないが，地形的にも恵まれているので今後その数は増加すると思われる。



第１図　遺跡所在地　（●印）

Ⅱ　調査に至る経過

昭和５３年夏，奥村勲氏は所有する丘陵東緩斜面に位置する段差のある２枚の畑地を，１ｍほど削平し，１枚の畑地として造成を行った。８月４日，野尻町文化財保護委員真方良穂氏（現同町教育長）により炉跡と考えられる角礫の集石群２ヶ所が発見され，その後の町教育委員会の現地調査で，造成地東半で２０数ヶ所の集石群が確認された。集石群内では炭化物が認められ，押型文土器も発見され，集石群は縄文早～前期であることが判明した。

奥村氏は，５４年３月以降，耕作を行う予定であったので発掘調査を行うことになった。調査は，県教育委員会が主体者となり，県総合博物館主事面高哲郎の担当で，昭和５４年２月１３日から１７日まで（計５日間）野尻町教育委員会の協力をえて実施された。

調査を快諾していただいた奥村勲氏，および調査期間中多大な協力をいただいた真方良穂氏に感謝いたします。

Ⅱ　調査の結果

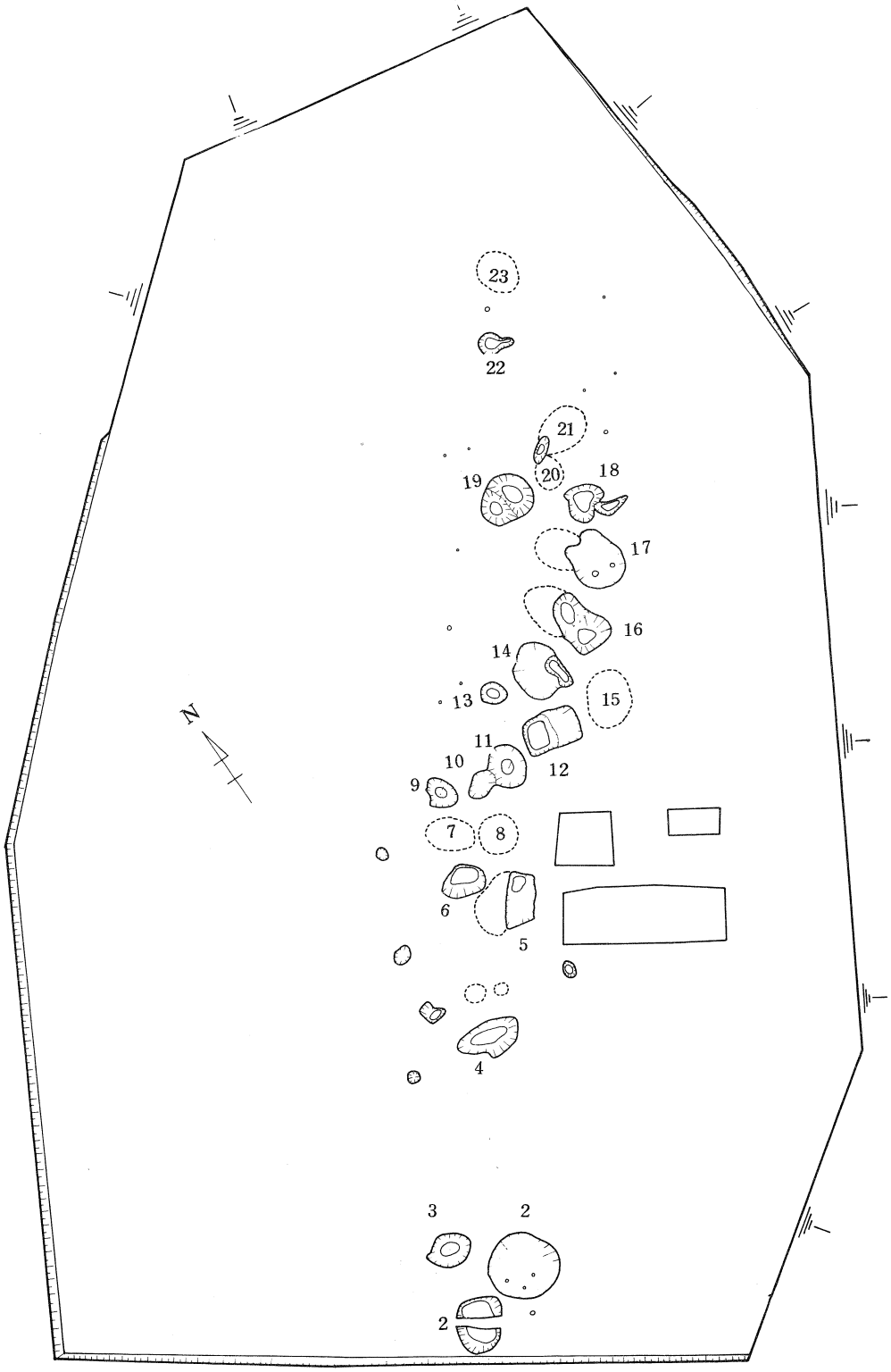
１．遺跡の概要（第２．３図）

梯遺跡は，南方へ延びる丘陵性台地南端の東斜面で発見された。当地は，畑地造成により既に１ｍほど掘り下げられ，西半では小林軽石層が，東半では暗褐色ローム層が露出しており，集石遺構は，暗褐色ローム層面で発見されている。梯遺跡の基本層序は，第Ⅰ層表土，第Ⅱ層明褐色土層，第Ⅲ層黄褐色火山灰層（通称アカホヤ），第Ⅳ層灰青色火山灰層，第Ⅴ層暗褐色ローム層，第Ⅵ層小林軽石層となっている。

集石遺構は，２３基発見され，幅７ｍの帯状に北東から南西方向に分布する。遺構間は，１ｍ～２ｍと近接するが，分布状態から南西部の３

第Ⅰ層	表　　土	（３０cm）
第Ⅱ層	明褐色土層	（２０cm）
第Ⅲ層	黄橙色火山灰層（通称アカホヤ）	（２５cm）
第Ⅳ層	灰青色火山灰層	（１５cm）
第Ⅴ層	暗褐色ローム層	（５０cm）
第Ⅵ層	小林軽石層	

第２図　梯遺跡基本層序



第３図　遺構分布図

1

0　10 m

基と北東部の２０基に大きく２群に分けられる。また，調査は遺跡の一部を行ったのみなので詳細は不明であるが，集石遺構は，掘り込みの形態から基本的に次の３つに分類されるようである。

A…径が１３０cm前後，深さが４０cmほどで周壁傾斜角度が約５０度（第９，１１号）

B…径が１５０cm前後，深さが３０cmほどで周壁傾斜角度が約３０度（第３号）

C…掘り込みが浅く，径が２００cm前後と角礫が面的拡りをもつ（第２号，第１７号）

この他，第１６号や第１９号のように床面に数ヶ所の凹みのあるものもある。この集石遺構は，それぞれの凹みに配石された例もあり，複数の集石遺構が結合したものか，あるいはこれが本来の形態だったのか確認しえなかったが，後者の可能性が大きいと思われる。

当遺跡では，ピットも検出され，集石遺構北部では径１０～２５cm，深さ１５～３５cmのピットが東縁，西縁で２列確認された。南西では，径５０cm，深さ１０cmほどの掘り込みも検出されている。これらの遺構の性格については把握されなかったが，分布状態より集石遺構に伴うものと思われる。

なお，住居跡は確認されていない。

出土遺物は，集石遺構の検出された第Ⅴ層暗褐色ローム層中などで押型文土器，貝殻文土器などがあるがその量は少ない。集石遺構内からも同種の土器片が出土しているので，集石遺構は，縄文早期の時期の所産と考えられる。石器は，町教育委員会の調査時に磨石様のものが出土している。

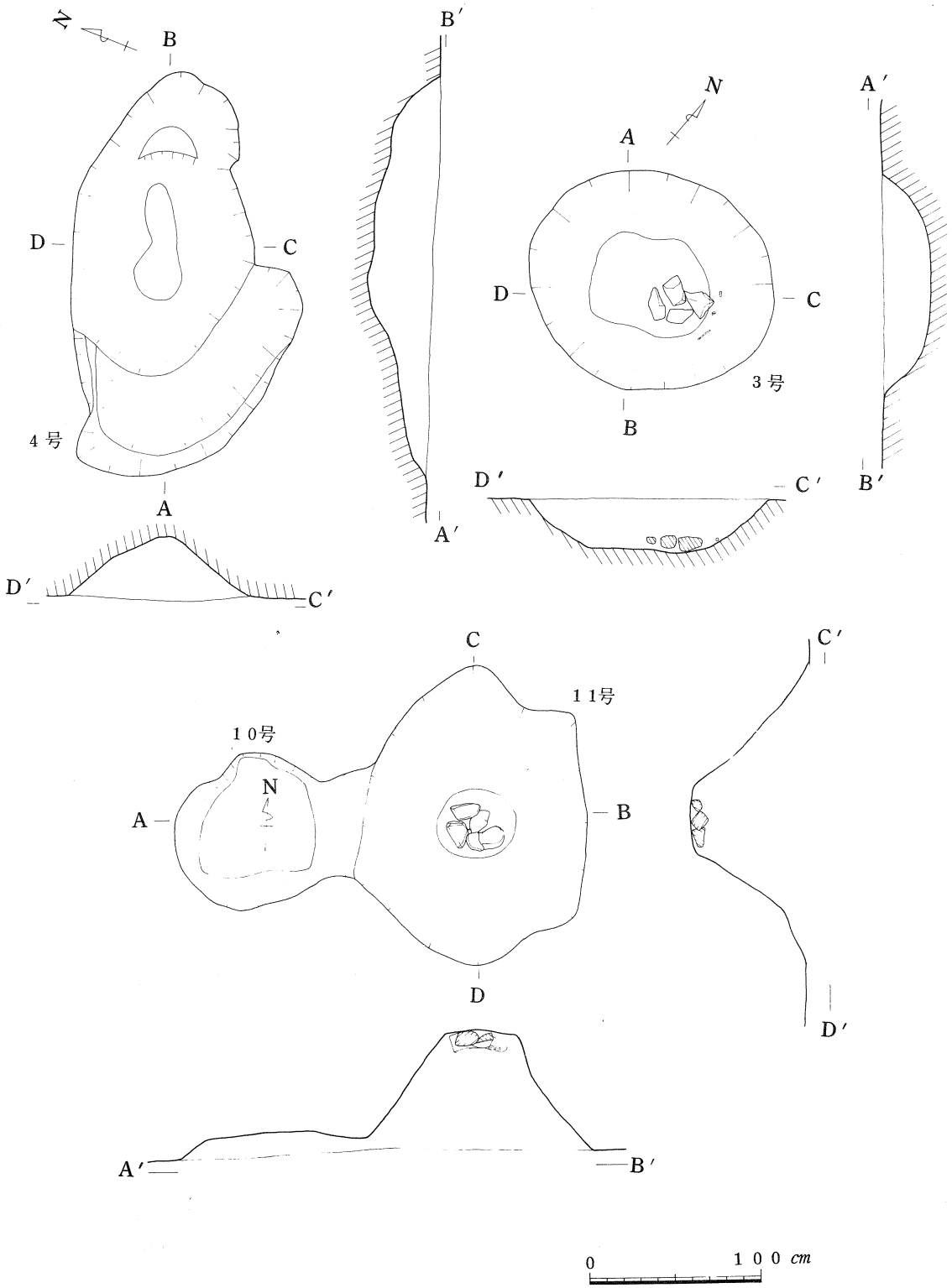
２．遺　　構

第３号集石遺構（第４図）

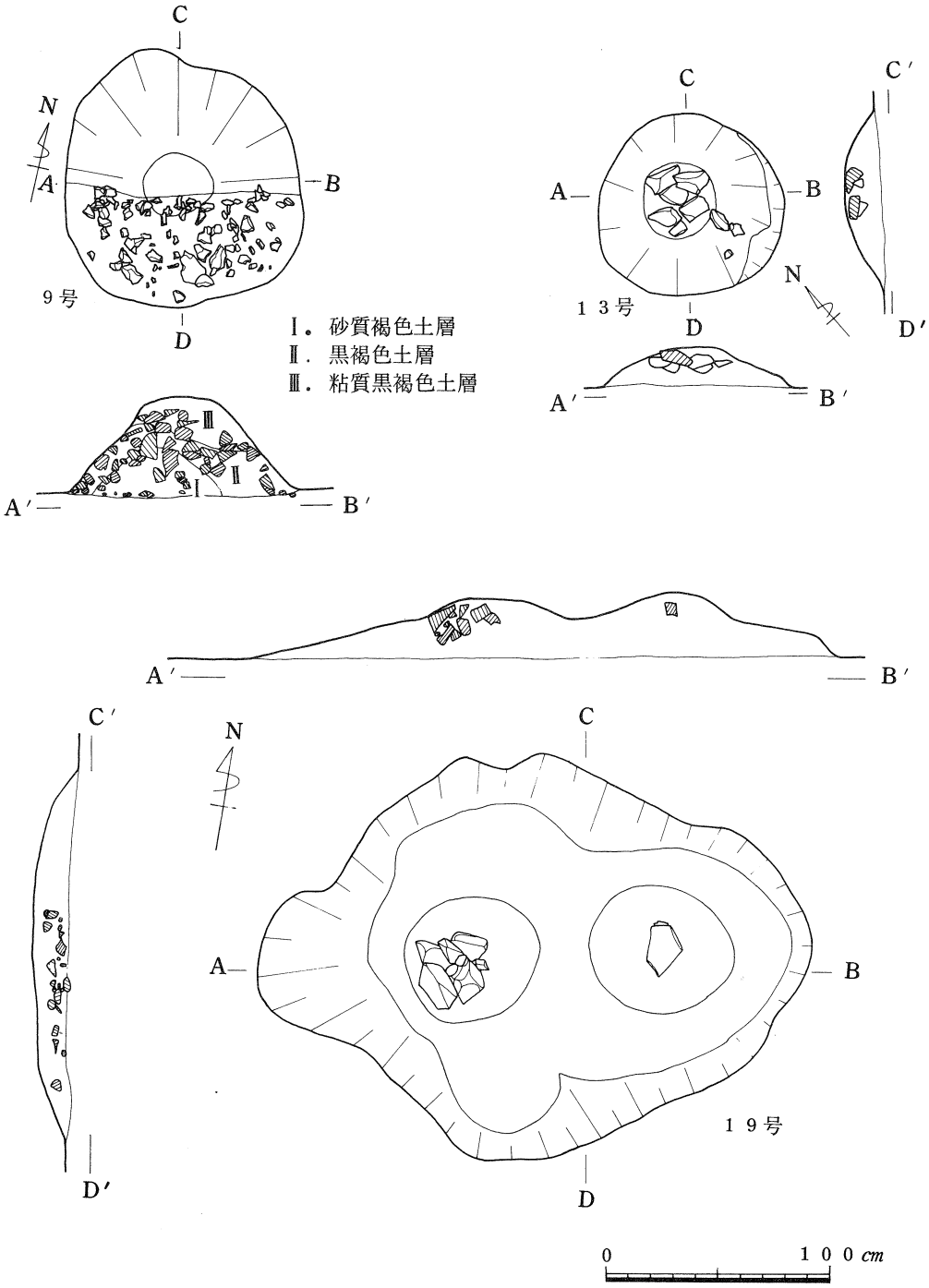
長径１４７cm，短径１２７cmの楕円形プランの掘り込みをもち，周壁は約３５度の傾斜をもち，B類に属する。床面には，河原石４個による配石があり焼けている。掘り込み内には，赤茶色を呈する拳大の砂岩質の角礫がつまっており，炭化物も出土している。焼土や周壁の焼けた痕跡はみられない。

第４号集石遺構（第４図）

長径２３０cm，短径１３０cmの不正長楕円形プランの掘り込みで，床面と思われる部分が３ヶ所ある。その深さは，西より２８cm，３６cm，４０cmであり，各床面は，３掘り込みに



第４図　第３，４，１０，１１号集石遺構実測図



第５図　第９，１３，１９号集石遺構 実測図

伴うものと考えられたが，その切合い関係は不明である。

第９号集石遺構（第５図）

径１１０*cm*の円形プランの掘り込みで深さ４５*cm*，周壁は約５０度の角度をもって立ち上がる。９号はＡ類に属する。掘り込み下半は小林軽石層中である。中には，焼けた拳大の赤茶色を呈する砂岩質の角礫がつまり，角礫間の埋土は，黒褐色ないし暗褐色を呈する。

第１０，１１号集石遺構（第４図）

第１０号は，径９０*cm*，深さ１５*cm*の浅い掘り込みをもつ。その東方には，長径１８０*cm*，短径１３０*cm*の楕円形プランの掘り込みで，周壁が約５０度で立ち上がる１１号が接している。１２号は，床面に５個の河原石の配石があり，配石上で炭化物が検出されている。掘り込み内につまっている角礫は焼けているが，焼土等は検出されていない。第１１号はＡ類に属する。

第１３号集石遺構（第５図）

径８０*cm*，深さ１５*cm*のすり鉢状の掘り込みをもち，床面には河原石による配石がある。Ｂ類に属する。

第１９号集石遺構（第５図）

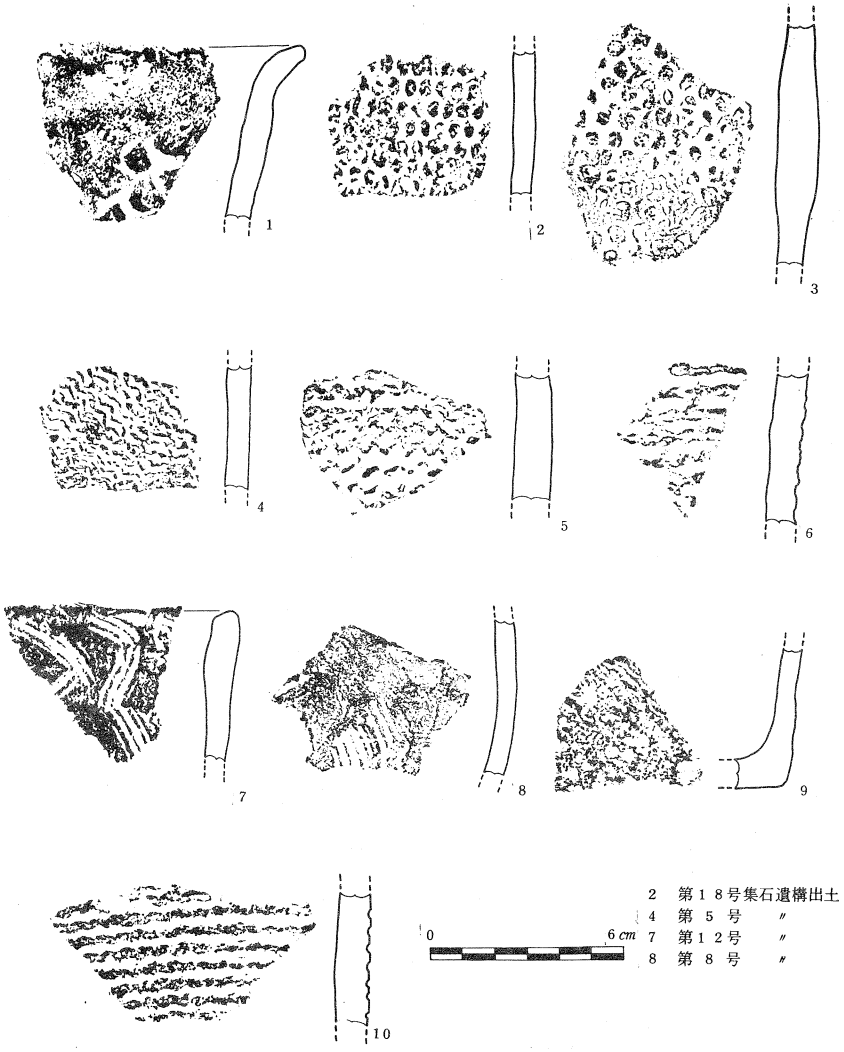
長径２５０*cm*，短径１８０*cm*の楕円形プランで角礫の集石が確認された。掘り込みは深さ２７*cm*と浅く，床面は２ヶ所あり，それぞれに配石がある。１９号は，径１*m*ほどのすり鉢状の掘り込みが結合したように見えるが，その切り合い関係は確認できなかった。

３．出土土器

出土した土器は，押型文土器，貝殻文土器，無文土器等であるが，その量は少ない。集石遺構より出土した土器は，第６図２（第１８号），４（第５号），７（第１２号），８（第８号）の４点で，他は暗褐色ローム層から出土している。

１は，口縁部が外反し，外面に粗大な楕円文が施文されている。２，３の楕円の粒子は１に比較して細かいが施文法が粗雑である。山形文である４，５，１０は施文法が粗雑で山形

も乱れている。6の施文具は不明であるが，凹み部分はヘラ様のもので施文されている。7は直口する口縁で端部付近はやや厚くなり，外面に4条の条痕が羽状に縦走する。8にも4条ないし5条の条痕がみられるが，器面は丁寧に調整され焼成も良い。9は底部で，上部に撚糸文がみられる。器面の剝離がひどい。



第6図　出土土器

Ⅳ　結　語

梯遺跡で調査された集石遺構２３基について，次のようにまとめることができる。

①　集石遺構は，丘陵東緩斜面に帯状に分布している[註4]。完掘の調査でないので断定的ことは言えないが，遺構群はさらにグルーピングできる可能性がある。

②　集石遺構は，黄褐色火山灰層（通称アカホヤ[註5]）の下の暗褐色ローム層中で発見されている。

③　集石遺構は，掘り込みの形態より基本的に３つに分類され，なかには床面に河原石による配石を伴うものもある。

④　掘り込み内には，焼けた角礫がつまっており，炭化物の検出されたものもある。周壁に焼痕や焼土は確認されていないが，集石遺構は「石蒸し」炉的機能をもつと考えられる。

⑤　集石遺構は，出土遺物や発見される層から考えて，縄文早期の所産と考える。

⑥　掘り込みの形態により３分類されたが，これは，時期差による形態差でなく，３形態は同時期に併用された可能性がある。

県内での集石遺構の調査は，梯遺跡が初めてであったが，昭和５４年１２月に清武町辻遺跡[註6]で，昭和５６年９月には新富町上日置で調査されるなど[註7]調査例が増加しつつある。その他西都市大口川，新富町一丁目，同町丸尾などにおいても法面で発見されている。これらの集石遺構はいずれも丘陵性台地や洪積世台地上で，しかも黄橙色火山灰層下の褐色ローム層で発見されている。

辻遺跡では，掘り込みをもたない平面的集石のみが検出されているが，上日置では，掘り込みをもつ集石遺構があり，その周囲から焼けた角礫が平面的に散在し，角礫上からは押型文土器が出土している。大口川では，褐色ローム層上層に厚さ１０*cm*内外の角礫の層があり，一ヶ所のすり鉢状の落ち込みも見られ，角礫層からは，押型文土器，貝殻条痕文土器等が出土している。同様な例は，一丁田，丸尾でも確認されているが，宮崎県内の縄文早・前期の集石遺構は，多様な形態があることを知ることができる。

註１　宮崎県教育委員会「柿川内第Ⅰ遺跡，柿川内第Ⅱ遺跡」瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（１９７６）

註２　宮崎県教育委員会「大萩遺跡（２）」瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（１９７５）

註３　宮崎県教育委員会「大萩遺跡（１）」瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（１９７４）

註４　集石遺構の分布状態や掘り込みの３形態は，福岡県深原遺跡（福岡県教育委員会，「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第８集」１９７８）の集石遺構に類似する。

註５　鬼界カルデラ噴出の火山灰といわれ，C^{14} 年代測定においてＢＰ６３９０±９０Ｙ〔松井１９６６〕という年代が与えられている。

註６　清武町教育委員会，清武町土地開発公社「辻遺跡」清武工業団地造成工事埋蔵文化財発掘調査報告　昭和５５年４月

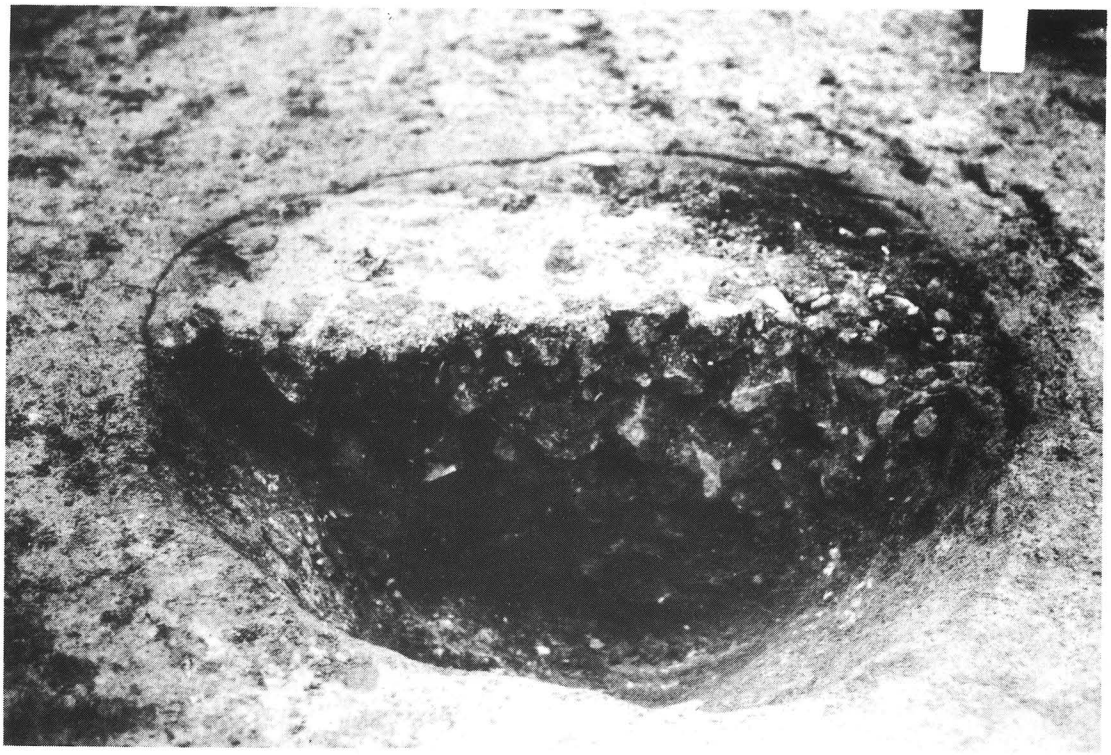
註７　ほ場整備中１基発見され，新富町教育委員会によって調査された。

(1) 遺 跡 遠 景 (北から)

(2) 遺 構 分 布 状 況 (南から)

（1）第 2 号集石遺構

（2）第 13 号集石遺構



（1）第 9 号集石遺構

（2）第 11 号集石遺構

（1）第 19 号 集 石 遺 構

（2） 同　　上